
ポケモン不思議のダンジョン空の探検隊 ウィングズ ～君と歩むこの道～

炎翼龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン空の探検隊 ウィングズ 君と歩むこの道

【Nコード】

N8492V

【作者名】

炎翼龍

【あらすじ】

世界に迫り来る危機・・・「星の停止」から、世界を救ったカズヤとフィルミィ。彼らは、ウィングズのメンバーのクルードと共にウィングズとしての活動を続けていた・・・しかし、そんな彼らに待ち受けるのは、闇の力・・・これは、どんな困難にも負けずに、ウィングズが自分達の道を進んで行く物語・・・

この小説は、「ポケモン不思議のダンジョン

ン 空の探検隊 ウィングズ 〱二匹の信じ合う冒険〱」の続編で
す。そっちを読んでいない方は、さきにそちらを読む事をお薦めし
ます。

キャラクター紹介（前書き）

という訳で、第二部、主要メンバー三匹の紹介です。

その他オリジナルキャラクターなどは、後書きなどで紹介するので、宜しくお願いします。

キャラクター紹介

名前 カズヤ
種族 ヒトカゲ
性別 ♂
年齢 ? (15、16)
性格 穏やか、勇敢
所属 ウイングズリーダー
一人称 僕

ウイングズのリーダーを勤める、元人間のヒトカゲ。世界を星の停止から救った後、タイムパラボックスにより一時は消えてしまったが、ディアルガの慈悲により復活。その後は再びウイングズに復帰している。ちなみに、十日間ギルドから無断で外出すると、そのギルドでの探検活動が出来なくなる、という条約があるが、飽くまでカズヤは任務中だったという事で、条約には当てはまらない。チームの副リーダーのフィルミイとは恋仲で、『バカップル』と称されるくらいに仲がいい。戦闘の経験は、第一部を見れば分かる通り、かなりの物。そんじょそこのポケモンでは、カズヤと戦っても勝つことは出来ない。その上、『覚醒』という、自身の潜在能力を100%解放出来る技術を、自在に使う事が出来る。体の中に、レシラムを宿しており、なにかしらのキツカケがあると、レシラムの力を解放する、『超覚醒』の状態になる。フィルミイの事を誰よりも大事にしており、フィルミイを傷付ける者は絶対に許さない。事によつては、覚醒まで使う。世界を救った事もあつてか、かなり有名な人だったりする。

名前 フィルミイ

種族 イーブイ
性別 ♀
年齢 15
性格 穏やか
所属 ウイングズ副リーダー
一人称 私

ウイングズの副リーダーを勤めるイーブイ。色々な経験をしたおかげか、前の臆病な性格は、かなり改善されて来ている。（それでもたまに怯える。）ウイングズのリーダーのカズヤとは、恋仲。想いが伝わるまでは、もじもじとしている事が多かったが、恋仲になると、かなり積極的になる。その為、周囲からは『バカップル』と称されるが、フィルミイは気にしていない。ついでに言うと、カズヤも気にしていない。戦闘力は、やはりそんなじよそらのポケモンよりは高いが、カズヤ程では無い。「てだすけ」や、「まもる」を覚えていたため、サポートに回る事も多い。カズヤと同様に有名人。

名前 クルード
種族 ワニノコ
性別 ♂
年齢 16
性格 無邪気
所属 ウイングズメンバー
一人称 俺

ウイングズに所属するワニノコ。基本的には、ウイングズのムードメーカー。たまにカズヤから辛辣な言葉を受けて、いじけたりしてるが、周りからは「漫才みたい。」と、面白がられている。実は恋仲のカズヤとフィルミイを見守ってるちよつと格好いい面もたまに

あつたりするが、最近はあまりのバカップルっぷりに、引き気味。戦鬪力に関しては、普通のポケモンよりはそこそこある、というくらい。未来世界や、幻の大地には行っていないせいか、カズヤやフイルミイに比べるとちょっと弱かったりする。が、足手まといになるレベルでは無い。彼も充分活躍している。カズヤやフイルミイ程では無いが、やはりウィングズのメンバーだからか、それなりに有名。

キャラクター紹介（後書き）

次話から、本編です。

第01話 卒業試験？（前書き）

第二部、始動です！

第01話 卒業試験？

星の停止を食い止めたカズヤ達。それからカズヤ達は、それまでと変わらずいつものように、修行生活を始めるつもり・・・だったのだが・・・カズヤが帰ってきた次の日の朝礼、唐突にそれは告げられた。

「『卒業試験？』」

三匹・・・カズヤ、フィルミィ、クルードの声がハモる。

「ああ。卒業試験だ。」

と、ペリクが言い出すと共に・・・

「おいコラ！先輩を差し置いて卒業ってどういう事だ！」

「納得行かねえぜ！ヘイヘイ！！」

と、ゴンドとヘイルが怒る。

「何を喚^{わめ}いてる。当然だろう。前例は無いものの、世界を救うという功績は、相当大きい。それこそ、一気に卒業試験が受けられるようになる程にな。」

「「うつ・・・」」

ペリクの説明を受け、二匹は何も言えなくなる。

「でも・・・俺も受けられるのか？俺は幻の大地に行った訳じゃ無いし・・・」

と、クルードが言う。なんせ、自分が世界を救った訳では無いのだ。自分が卒業していいものなのか、という疑問が出てくる。

「・・・まあ、確かにお前個人の功績だと、卒業は程遠いのだが・・・なんせ探検隊はチームで一つ。お前もウイングズの一員だ。ウイングズ総合では、充分卒業レベルまで来ているからな。」

と、ペリクは長々しく説明する。

「・・・ふん・・・そういうもんなのか・・・」

クルードは、とりあえず納得しておく事にした。

「でも！凄いですわ！ギルドに入門してからこんな短時間で卒業試験までいけるなんて！」

「二人の愛の力ですね！きやつ！」

と、リンが言う。昨日、カズヤとフィルミイは、フランとリンの、事情聴取（笑）を受けたので、最早二匹の仲は、公認になってきている。最近は、二匹も隠す気は無いのか、ラブラブっぷりを見せたり・・・『バカップル』と称される程だ。

「あ、愛の力・・・／＼／＼、そうかもね・・・！」

「ま、そういう事だよね。」

このように、隠す気は無い。

「・・・俺は？」

一人蚊帳の外になるクルードであった・・・

「さて、卒業試験の内容だが・・・『神秘の森』に行って貰う。」

「『『神秘の森？』』」

再び三匹の声がハモる。

「うん。トレジャータウンの北北東に位置する森の事なんだけど・・・そこにあるお宝を取ってきて欲しいんだ。」

と、レイリンが説明する。

「お宝、ねえ・・・」

「なんか、簡単そうだけど・・・」

と、カズヤとフィルミィが呟く。

「ところが！その森には、悪の大魔王っていうのがいるんだよ。」

「『『悪の大魔王？』』」

カズヤ達、本日三度目のハモリ。

「うん。とんでも無く恐ろしい奴で、たくさんの手下も率いてるんだ。」

（・・・なんか胡散臭い話だなあ・・・）

「うん、ちょっと怖そうだけど・・・カズヤがいれば、大丈夫だよね!」

「そうそう!僕がいれば大丈夫!」

と、ラブラブな二匹の影で・・・

「いや・・・だから、俺は・・・?」

やはり蚊帳の外なクルードであつた・・・

「トレジャータウン」

「卒業試験って言うなら、しっかり準備していかなきゃね。」

カズヤが言っている通り、三匹はトレジャータウンに買い出しにやって来た。

「ん……？あ、ツクミだ！」

ツクミ……覚えているだろうか？カズヤとフィルミイが、滝壺の洞窟から温泉まで流された時、一番に心配してくれた、あのヒメグマだ。

「……あら？貴方達……」

文中では書かれていないが、あれからたまにトレジャータウンで会うと、喋ったりしているのだ。ちなみに、やはり文中では書かれていないが、クルードも実はすでに会っているので、ツクミとは知り合いである。

「よう！なんか見慣れない顔があるな？」

クルードは、ツクミの隣を見てそう言う。ツクミの隣には、大きい体をしたリングマがいた。

「ツクミ、知り合いか？」

「ええ、ちよつとね。」

「そうか。俺はクロウスだ。宜しくな。」

そのリングマ・・・クロウスは、カズヤ達に自己紹介をする。

「僕はカズヤ。探検隊ウィングズのリーダーだよ。宜しく。」

「私はフィルミィ！探検隊ウィングズの副リーダー！宜しくね！」

「俺はクルードだ。ウィングズに所属してる。宜しく！」

カズヤ達も、自己紹介をした。

「ところで、貴方達、今日はどうしたの？」

ツクミが首を傾げながらそう聞く。

「ん？なんか卒業試験をやるみたいなんだけど・・・神秘の森に行つて宝を取って来い、って奴なんだよ。」

「あら、神秘の森に今から私達向かうところだったのよ。」

と、ツクミが言う。

「ふん・・・なんかあそこには悪の大魔王（笑）がいるみたいだけど、大丈夫なの？」

カズヤはもうさらさら信じる気は無いようである。

「悪の大魔王？何だそれ？」

「私達よく神秘の森に行くけど そんなの見た事も聞いた事も無いわよ？」

と、二匹とも知らないようだ。

「あれ？おかしいな・・・」

フィルミイは考え込む。

「まっ、私達はもう行くから。どこかで会つかもしれないわね。」

「そうかもな。」

「じゃっ！バイバイ！」

「じゃあな。」

こうしてツクミとクロウスは、神秘の森へと向かって行った・・・

「・・・さあて、買い出しに行こうか！」

「うん。」

「おう。」

「「ありがとうございます！」」

シヨウとバイの声を受け、ウィングズは神秘の森へ向かおうと、町の外への出口、交差点へと向かっていた。その時・・・

『どんっ！』

「うわっ！」

「きゃあ！」

カズヤが、誰かとぶつかり、カズヤは尻餅をついてしまう。

「あら、ごめんなさい！大丈夫かしら？」

「いてて・・・大丈夫ですよ。」

カズヤは起き上がり、ぶつかったポケモンを見ると、そのポケモンが、ライチュウである事が分かった。口調や、声の高さからして♀だろう。

「ごめんなさい・・・よそ見しちゃったみたいだわ。」

「いや、大丈夫ですよ。大した事ありませんから。」

カズヤが敬語なのは、その物腰からして、明らかに自分より年上だと感じ取ったからだろう。

「そう？大丈夫ならいいんだけど・・・それじゃあね、坊や。」

そう言うのと、そのライチュウは、カズヤ達を通り抜けて、去っていった・・・

「・・・あのポケモン、大人だねえ・・・！」

フィルミィは、なんとなく憧れの視線を去っていったライチュウに向ける。

「何言ってるの！フィルミィの方が断然可愛いから！」

「も、もう・・・カズヤったら・・・／／／／」

「うわあ・・・」

相変わらずバカップルをやっている二匹に、クルードはどん引きす

るのだった・・・

「・・・さっ！買う物は買ったし！早く神秘の森へ行こう！」

「うん！」

「おう！」

こうして三匹は、神秘の森へと向かって行った・・・

「なる程ねえ・・・あれが世界の英雄様・・・カズヤ、か・・・」

たっ たさっ きぶつかつたライチュウが、そう言いながら不気味な笑
いを浮かべているのにも気付かず・・・

第01話 卒業試験？ 完

次回 神秘の森、悪の大魔王とは？

第01話 卒業試験？（後書き）

という訳で、第一話でした。

いきなりオリキャラを出させて頂きました。ハイ。
ではまた次回！

第02話 神秘の森、悪の大魔王とは？（前書き）

第二話、更新です。

カズヤ「ペース落ちたね・・・」

うるせーよ。

第02話 神秘の森、悪の大魔王とは？

「これが神秘の森の入り口だな。」

カズヤ、フィルミィ、クルードは、神秘の森の入り口へとやって来ていた。いよいよ卒業試験の始まりだ。

「なあ、ここって不思議のダンジョンなのか？」

「え？・・・多分そうだと思うけど・・・」

「不思議のダンジョンって、確か時が狂い始めた影響で出現したんだよね？」

と、クルードは二匹に確認する。

「うん。そうだよ？」

「今は時が正常に動いてるのに、なんで不思議のダンジョンがあるんだ？」

時が狂い始めた影響で、不思議のダンジョンは出現した。ならば、時が正常になったのなら、不思議のダンジョンは無くなるんじゃないかと考えたのだ。

「その辺は、なんかペリクが言ってたけど・・・なんでもすぐに直る訳じゃ無いんだって。それこそ、僕達が生きてる間には直る事は無いってね。」

と、カズヤが説明する。いくら時が正常に動き始めたとは言え、突然元に戻る訳では無いのだ。元に戻るには何百年か掛かるだろう。

「ふん・・・」

クルードは取りあえず納得したようだ。

「ねえ、早く行こ？」

と、フィルミイはカズヤとクルードに促す。

「そうだね、行こうか。」

「ああ。」

こうして三匹は、神秘の森の中へと足を踏み入れていった・・・

く 神秘の森 く

「さて、ここに出てくる敵はどれぐらいの強さ・・・」

と、カズヤが言いかけた時、茂みから何かが飛び出してきた。三匹は警戒体制になる。が、それはすぐに解ける事になる。

「・・・え・・・？」

そのポケモンを見て、三匹は拍子抜けとなる。

「えっと、このポケモンは確か・・・フシギダネ・・・だっけ？」

思ったより、ランクが低いポケモンの登場に、若干気が抜ける三匹。

「いや、もしかしたらフシギダネだけど強いんじゃないか？」

と、クルードが推測してみる。確かに、カズヤみたいなヒトカゲもいるので、一概にありえないとは言えない。と、その時、

「うわっ！」

クルードにたいあたりを仕掛けてきて、見事それはヒット・・・したのだが・・・

「・・・あれ？・・・なんかほとんど痛みが無いんだけど・・・」

と、クルードが呆気にとられる。

「・・・もしかして・・・物凄く弱い・・・？」

試しに、フィルミィが直線的なかわやすい通常攻撃をフシギダネに出してみる。すると、フシギダネはかわす事もせず、当たってし

まい、そのまま気絶してしまった・・・

「「「・・・」」」

カズヤとクルードは、呆れた表情、フィルミィは苦笑いになっていた・・・

「・・・先・・・進もうか・・・」

「うん・・・」

「ああ・・・」

そのまま三匹はさっさと進む事にした・・・

「・・・さっきとは随分レベルが違うのが出てきたね・・・」

三匹は、あるポケモンと対峙していた。

「ここのポケモンの強さってバラバラだね・・・」

と、苦笑いをするフィルミィ。

「さっきフシギダネかと思えば・・・今度はドダイトスかよ・・・」

そう。今対峙してるのは、ドダイトス。明らかにさっきと比べ、強そうだ。だがしかし・・・

「悪いけど、さっさとどいて貰うよ。」

そう言うとカズヤは、ドダイトスが反応出来ないスピードの低空ジヤンプで近付き、超至近距離でかえんほうしゃを放った。ドダイトスは炎に飲み込まれる。

「さすがカズヤ・・・！」

「俺の知らない間にどんどん強くなってるな・・・」

目を輝かせるフィルミィと、カズヤの強さに驚くクルード。

「こんなもんかな。」

かえんほうしゃが無くなると、そこには黒焦げになって倒れているドダイトスがいた。

「カズヤ・・・ちょっとやり過ぎなような気がするんだが・・・」

「あはは・・・そうかな・・・じゃあ・・・ちょっとこれを置いて行こう。」

と、カズヤはオレンの実を、倒れているドダイトスの目の前に置いておいた。

「さ、行こうか。」

三匹は、更に奥へと進んでいく・・・

く 神秘の森 奥地く

「っていつかその宝つてのにはまだ辿り着かないのかあ？」

「まただね。」

クルードの質問に、あっさりと答えるカズヤ。

（それにしても・・・）

カズヤは、地面のある一点を見る。

（分かりやすい落とし穴だな・・・）

カズヤが見ていたのは、他の場所と違い、あからさまに葉っぱが詰められている所。どう見ても落とし穴だ。

（レイリンが仕掛けたのかなあ・・・？だとしたらごめんね。さすがにこんな分かりやすいのには引く掛からない・・・）

と、そこでカズヤは思考を中断させられた。

「きゃっ！」

フィルミイが突然転ぶ。よく見ると、フィルミイの足元には大きめな石が・・・フィルミイの転倒に、カズヤも巻き込まれる。

「うわあ！」

そのまま、二匹は葉っぱが詰められた方へ行き・・・案の定、落ちた・・・

「うわああああ！」

「きゃあああああ！！！」

取り残されたクルードは・・・

「ええ！？・・・しょうがない・・・」

そう言い、意を決して、開いた穴へ飛び込んで行った・・・

「うわああああ！」

「きゃあああああ！！」

『どんっ！』

カズヤとフィルミィは、穴の中へと辿り着いた。

「痛たたた・・・」

カズヤは辺りを見回してみる。すると、岩の壁に囲まれている事が分かる。

「ごめんねカズヤ・・・私が転んだりしたせいで・・・」

「気にしないでいいよ。取りあえず今は上がる方法を・・・」

と言いかけたその時、

「うおおおおっ！」

「え？」

『どんっ！』

クルードが落ちてきた。

「いつてえ・・・」

「クルードも降りてきたの？」

「あそこに一人だけ取り残されてもな・・・」

「うん・・・まあね・・・」

と、その時、

『ゴゴゴゴゴゴ・・・』

「へ？」

上から音がする。三匹は上を見ると、穴がどんどん閉じていく。そして辺りは暗くなっていき・・・

『ドオオオン・・・』

ついには真っ暗になってしまった。

「何も見えないよお、カズヤ・・・」

暗闇は怖いのか、少し怯えるフィルミィ。

「大丈夫だよ・・・何があってもフィルミィの事は守る。」

と言って、カズヤはフィルミィを慰める。その時、どこからか声が聞こえた。

「クーツクツクツク。」

「「!?!」」

「……?」

フィルミィとクルードは驚くが、カズヤは疑問に思っていた。声が聞いた事があるような気がするのだ。だがしかし、暗くて姿は見えない。

「ここに迷い込んだからには、もうお仕舞いさ。」

「もしかして……悪の大魔王……?」

フィルミィが恐る恐る聞いてみると、

「その通り!」

と、返答が帰ってくる。

「私達大魔王様の子分もいるんだぞ!」

と、別の声も聞こえてくる。それなりに数は多い。だが……

(やっぱりなんか……聞いた事ある気がするんだけど……)

やはり、どこかで聞いたような気がする声。その時……

『コトコトコトコト……』

「あれ？」

何故か、穴を塞いでいた物が、再び動き出し、辺りは明るくなる・・・そして・・・悪の大魔王の姿が露に・・・

「あ・・・」

「・・・え・・・？」

フィルミイは呆氣にとられる。

「やつぱり・・・」

カズヤは呆れた表情になる。

「まさか・・・・・・レイリン!!?」

そう・・・そこにいたのは・・・レイリンだった・・・

一方その頃・・・

く????

（あれが、英雄・・・ねえ・・・）

そう考えながら歩くライチュウがいた。

「・・・ようやく戻ったのか・・・レミル・・・」

「あら、ラウスじゃない・・・」

ライチュウ・・・レミルに声を掛けたのは、ラウスと呼ばれるゾロアーク・・・そう。北の砂漠でカズヤ達を襲ってきたポケモンだ。

「どこをほつつき歩いてた・・・我らが四天王の役目を忘れたか・・・？」

「もちろん、忘れて無いわよ？」

「・・・だったらいい・・・さっさと自分の持ち場に戻れ・・・」

「はいはい、そのつもりで来たのよ。貴方に命令されなくても分かっているわ。」

「・・・貴様、何を企んでいる・・・？」

「はあ？」

あっけらかんとした声を出すレミル。

「私達は、・・・様に仕える四天王。・・・様には、絶対の忠義を
払わなくてはならない・・・だが、貴様はその様子が伺えない・・・」

「なによ、疑っているの？大丈夫よ。忠義ならしっかりと払ってる
わ。」

そう言いきるレミル。

「・・・分かっていると思うが・・・裏切り行為は許されない・・・
いいな？」

「はいはい、しつこいわね・・・四天王の中で二番目に強いぐらい
で調子に乗らないでよね・・・」

と、後半の部分は小声で言いながら、レミルはその場を後にした・・・

「・・・」

第02話 神秘の森、悪の大魔王とは？ 完

次回 対決！悪の大魔王（笑）

第02話 神秘の森、悪の大魔王とは？（後書き）

もうお分かりになったと思いますが、あのライチュウは、四天王の一人です。

カズヤ「誰が四天王？」

君は知らなくていい。

カズヤ「・・・？」

ではまた次回。

第03話 対決！悪の大魔王（笑）（前書き）

三話です！

カズヤ

「見れば分かるよ。」

だよね・・・

カズヤ

「ていうかペースが落ちる方向にあるんだけど。」

気にするな。気にしたら負けだ。

カズヤ

「何に？」

では、三話ぐつぞ！

第03話 対決！悪の大魔王（笑）

暗闇が晴れると、そこにいたのは、レイリンにギルドの弟子達だった。

「レ、レイリンじゃねえか!？」

「まさかレイリンが悪の大魔王だったの!？」

と、驚くクルードとフィルミィ。

「・・・元々悪の大魔王なんていなかったんじゃないの？」

と、呆れた様子で言うカズヤ。

「コッ、コラ!!ビツケ!!なんで蓋を開けてしまうんだい!!」

と、ペリクが上に向かって叫ぶ。すると・・・

「えっ、ええ!?!だ、駄目だったんでゲスか!?!あっしは暗いと見えづらいかなと思って・・・」

と、上から抗議の声が聞こえてくる。

「おだまり!それが狙いなんだよ!!!」

と、ペリクが再び叫ぶ。上では、ビツケがしゅんとなっている事だろっ・・・

「・・・で？一体どういう事なの？レイリン。」

と、カズヤがレイリンに尋ねる。

「・・・・・・・・」

レイリンはカズヤに尋ねられ、しばらく固まる・・・そして、口を開けたかと思ったら、言い出した事は・・・

「・・・レイリン？だあれ？それ。」

「「は？」」

「え？」

カズヤ達は、レイリンから出た言葉に呆氣に取られる。

「僕は悪の大魔王。レイリンなんか知らないよ？」

と、しらばつくれるレイリン・・・悪の大魔王。

「そ、そうだぞ！私達も、ペリクとか、全然知らないぞ！」

ペリク・・・そのペラップは、騒ぎ始める。

「お、俺だって、ヘイルとか知らないぜ？ヘイヘイ！」

「わ、私もフランなんて知りませんわ！」

「ワ、ワシもゴンドとか知らんからな！」

口々に言う弟子たち……悪の大魔王の子分。

（この人らは嘘つくの下手くそだな……まあ人じゃないけど。）

と、心底呆れっぱなしのカズヤ。

「な、なんで！？どうなってるの！？」

「意味分かんねーぞ！？」

悪の大魔王達の、意味不明な発言に、慌てるフィルミイにクルード。

「二人とも！多分、ギルドの皆を倒すっていうのが試験なんだ。」

「だから！ギルドとか知らんと言っているだろう！」

とかペラップが言っているが、カズヤは無視。

「だからこんな悪の大魔王なんてのをやった訳なんだろうね。」

と、カズヤは二匹に説明する。

「な、なるほど……」

「取りあえず分かったぜ……でも大丈夫なのか……？三匹でこれ……」

「……まあなんとかなるでしょ。でも確かにキツイよね……」

「これは卒業試験だし・・・本気で挑むべきだよね・・・」

「あ、ああ・・・そりゃあ、そうだと思うけど・・・」

「なら・・・」

その時、カズヤの体が一気に炎に包まれた。

「カ、カズヤ！もしかして・・・！」

「・・・この力も、ありだよな・・・？」

カズヤは目を開く。そこには、青い炎が宿っている。覚醒を使っただのだ。

「・・・フィルミィ、クルード・・・お前達は、暫くレイリンの相手をしてくれ・・・それ以外は俺が、一手に引き受ける・・・」

と、端から見ると、無茶な事を言い出すカズヤだが・・・

「・・・分かったよ！」

「りょーかい！」

フィルミィにクルードは知っている。覚醒状態のカズヤが、どれだけ強いのか。

「行くぞ・・・！」

カズヤは、自身の目の前に、十個の炎の球体を作り出し・・・

「爆追球!!」

そう叫ぶと、炎の球は、ドゴーム、キマワリ、ヘイガニ、ディグダ、ダグトリオ、チリーン、グレッグルに一つずつ、ペラップに、三つ飛んでいく。

「ぐあっ!!」

「うわああ!!」

大体の者はかわしたが、ドゴームとヘイガニはかわしきれず、爆風に巻き込まれる。

「うぐっ・・・」

「痛たた・・・」

ドゴームは今ので早くもダウン。ヘイガニは、水タイプだったおかげか、なんとか耐えた。が・・・

「何をしている・・・」

カズヤは猛スピードで、立ち上がるうとしているヘイガニの前に行き、少し上をとり、片足を振り上げる。

「炎襲脚!!」

そう叫ぶと同時に、カズヤは、振り上げた足に炎を宿し、そのまま降り下ろす。要するに踵落とした。

「がはっ・・・！」

ヘイガニは、その場に倒れた。と、その隙に、後ろからキマワリがはっぱカッターを放ってくるが、

「甘い・・・」

片手を構えて、かえんほうしゃを放つ。はっぱカッターは全て燃え尽き、その先にいるキマワリにもかえんほうしゃが降り掛かろうとする。

「きゃっ！・・・今のは危ないですわ・・・」

しかし、なんとか寸前でキマワリはかわす事に成功。すると、更に後ろから、チリーンがエスパー技を仕掛ける素振りを見せ、それを守るようにグレッグルが立ち塞がる。

「まとめてぶっ飛べ・・・業炎流波！！」

業炎流波とは、目の前に炎の波を出現させ、それを相手に飛ばすという技。他の技より若干威力は劣るものの、効果範囲はかなり広い。

「うおっ・・・！」

「きゃあっ！！」

グレッグルとチリーンは、炎の波に飲み込まれる。

「これでどうだい！！」

ペラップは、カズヤに向けてエアカッターを五発連続で放ってくる。

「・・・」

カズヤは無言で、最低限の動きでエアカッターをかわす。その時、炎の波が退き、グレッグルとチリーンが出てくる。グレッグルはなんとかまだ戦えそうだが、チリーンはかなりふらふらしている。それをカズヤは見逃さない。

「くらえ・・・！」

カズヤはかえんほうしゃをチリーンに向けて放つ。チリーンはかわせず、直撃。炎が無くなると、目を回して倒れているチリーンがいた。

「これで残り五匹か・・・」

カズヤは、残りの弟子たち・・・子分達を、睨み付ける。その子分達の表情は、かなり驚きに満ちていた。

「ま、まさか覚醒状態がここまで強いなんて・・・」

「想像以上だな・・・」

「ていうか・・・強すぎです・・・」

と、キマワリ、ダグトリオ、ディグダが口にする。

一方・・・

「でんこうせっか!」

「遅いよ!」

「れいとうパンチ!」

「当たらない当たらない♪」

フィルミイとクルードは、かなり苦戦を強いられていた。強いのだ。レイリン・・・このプクリンが。フィルミイ達が攻撃をしても、ひよいひよいかわし、回避不能なスピードスターを使うと、それ以上の威力のハイパーボイスに掻き消される。今のところ、プクリンの攻撃はフィルミイのまもるで防いでいるが、プクリンは手加減をしているようにしか見えない。本気を出されたら、まもるなんて簡単に破られるかもしれない。そんな不安が、フィルミイの頭を巡っていた。

（カズヤ・・・早く来て・・・!）

そのカズヤはと言うと・・・

「・・・案外時間が掛かるものだな・・・何か一気にかたをつける方法は・・・・・・・・！思い付いた・・・あれがあつたな・・・」

カズヤは双龍紅蓮爪を発動し、両方地面に突き刺す。

「くらえ・・・炎獄震柱！！」

カズヤがそう言うと、グレッグル、キマワリ、ディグダ、ダグトリオ、ペラップの足元から、炎の柱が噴き出す。突然の事に反応出来ず、全員が攻撃を受けた。

「ぐあっ・・・」

「きゃっ！！」

「うわっ！」

「ぬおっ！」

「ぐっ・・・・・・・・！」

そして、ダメージが溜まっていたグレッグルと、効果抜群なキマワリが倒れる。ディグダとダグトリオは、かなりキツそうだ。ダグトリオは、カズヤにどろばくだんを放つ。

「当たる気は無い・・・！」

カズヤはどろばくだんを必要最低限の動きでかわす。効果抜群なので、覚醒状態とは言え、それなりにダメージを受けてしまうからだ。しかし、かわした矢先、カズヤの足元から炎が噴出する。

「ちっ・・・！だいちのちからか・・・」

ディグダのだいちのちからだ。カズヤは間一髪でそれを避けると、ダグトリオに近づき、双龍紅蓮爪で引き裂いた。

「ぬおっ！？」

ダグトリオはこの一撃でダウン。更に、その様子に目を引かれているディグダにカズヤは、かえんほうしゃを放つ。炎がディグダを包み、ディグダは倒れた。

「うう・・・」

「残りは・・・お前だけだ・・・」

「なかなかやるね・・・」

ペラップは、内心焦っていた。覚醒の力がまさかこれ程とは、と。

「くられ・・・！」

「はがねのつばさ！」

カズヤは低空ジャンプをしながら双龍紅蓮爪、ペラップは、低空飛行をしながらはがねのつばさ。カズヤとペラップが交差し、地面に降りる・・・

「・・・うぐっ・・・」

倒れたのは、ペラップの方だった・・・

「・・・よし・・・残りは、あいつだけだな・・・」

一方・・・

「スピードスター♪」

「スピードスター!!」

二つのスピードスターがぶつかり合う。プクリンのと、フィルミイのだ。フィルミイのが押され始め、ついにはくらってしまふ。

「きゃあっ!!」

「フィルミイ!大丈夫か?」

クルードは、声を掛ける。

「う、うん・・・なん、とか・・・でも、このままだとまずいかも・・・」

フィルミイもクルードも、もうかなりボロボロ。

「くらえっ」

プクリンは、フィルミイにとっしんを仕掛けてくる。

「っ……！」

かわそうとするフィルミイだが、体が上手く動かない。

「だったら……！」

フィルミイはまもるを発動しようとする。しかし……

「あれ……？」

まもるが出ない。PP切れた。

「も、もうダメっ……！」

フィルミイは目を瞑る。クルードも、体が上手く動かないせいで立てない。

「っ……！」

プクリンが目の前まで来た、その時、

「炎襲脚……！」

その声と同時に、プクリンに踵落としが決まる。カズヤだ。

「カ、カズヤ……！」

フィルミイは、嬉しそうな表情になる。

「よく頑張ったな．．．．．クルードもな。お前達は端の方で休んでろ。」

「あ、待つて．．．これを．．．」

フィルミイは、てだすけを発動。カズヤに力が送られる。

「．．．ありがとうな。さあ、早く．．．」

その声で、フィルミイとクルードは、体をズルズルと引きずりながらも端の方へと移動し、そこで体を休める。残ったカズヤはプクリンの事を睨む。

「凄いいゝあれだけの数は無傷で倒しちゃうなんてゝ。やっぱり覚醒って凄いのかな？」

「．．．．．能天気な奴だな．．．今の状況が分かっているのか？」

「分かってるよゝ？ただ、さあ．．．」

突然、プクリンの声が低くなる。

「．．．僕も、覚醒使えたら、どうする．．．？」

「．．．なに．．．？」

プクリンは、フィルミイとクルードには聞こえないくらい小さく、普段からは想像出来ないくらいの背筋が凍るような声で、カズヤに

そう言う。

（まさか・・・こいつも覚醒が使えるっていうのか・・・？いや、まさか・・・だが、有名なギルドの親方をやっているくらいだ・・・もしかしたら・・・）

「・・・なぐんてね♪」

「なに？」

「冗談冗談♪そんなの僕には使えないよ？」

（・・・あの声で言った事が、冗談だったのか・・・？）

さっきのプクリンの様子は、紛れもない真実を言っているかのようだ。しかし、今は「冗談冗談♪」と笑っている。

「・・・まあいい・・・お前を倒せばいい話だ。」

そう言つて、カズヤは双龍紅蓮爪を構える。

「よし、行くよ♪ ハイパーボイス！」

プクリンは、ハイパーボイスの声を、レーザー状に放つ。ハイパーボイスの音を、レーザー状にまとめるのは、かなり上級者向けの技。それをいとも簡単にこなしてきた。レーザー状になると、範囲は狭まるが、威力は格段にアップする。

「当たるか・・・！」

カズヤは、飛び退いてハイパーボイスをかわす。すると、ハイパーボイスは壁に激突し、その壁にはかなり大きな穴が開いた。

（いくら今の俺でも・・・直撃したらかなり大ダメージだな、今は・・・）

「何してんの？とっしん！」

プクリンは、カズヤに向かって突進してくる。

「させるか・・・！」

カズヤは、タイミング良くプクリンに向かって、回し蹴りを放ち、見事にそれはヒット。そして、プクリンは壁まで吹き飛ばされる。

「・・・痛たたた・・・今のは効いたよ・・・」

と言いながら起き上がるプクリン。

「これで終わりにしてやるよ・・・」

カズヤは両手を前に突きだし、そこに炎のエネルギーを溜める。

「よし・・・とっておき、行くよ！」

プクリンは、自身の口に、膨大なエネルギーを溜めていく。そして・・・

「はかいこうせん・・・！」

「火炎龍砲!!」

二つの技がぶつかり合う。最初は同等の力に見えたが、次第に火炎龍砲が押し始める。

「うわわ・・・こりゃ勝てないや・・・皆、逃げろ!!」

と、プクリンが言うと、プクリンは迫ってきていた火炎龍砲をかわし、何故か上から降りてきた梯子を使って上へと登る。それに続いて、さっきまで倒れていた者達も、脱出していく。(ペラップは飛んでいった。)

「え、ええ!?!」

「最後は逃げんのかよ!?!」

と、驚くフィルミィにクルード。

(・・・これで実質試験は終了ってところだな・・・多分お宝を取ってくるというのは飽くまで名目。こっちが本当の試験だったんだろっ・・・)

と、カズヤは考える。

「それにしても・・・あの梯子は一体・・・」

「さっきビツケが上にいただろう。恐らくあいつだ。」

「な、なるほど・・・」

（しかし・・・プクリン・・・あれで本気だったのか・・・？覚醒
をさせる素振りを見せた事と言い、終始ふざけていた感じがした事
と言い・・・まさか、本当に・・・）

そう考える、カズヤであつた・・・

第03話 対決！悪の大魔王（笑） 完

次回 光の泉

第03話 対決！悪の大魔王（笑）（後書き）

カズヤ

「結局、ペースの話はどうなんだ・・・？」

なんだ、まだ気にしてたのか・・・あれはラストスパートだったから更新スピードが上がっただけであって・・・またいつも通りに戻るよ。

カズヤ

「使えないな・・・」

何だとう（？）

カズヤ

「次回も、まあ・・・物好きな奴は楽しみにしてる・・・」

おいこら！！失礼だぞ！！

カズヤ

「・・・一般人、楽しみにしてる・・・」

ええ・・・なんだその言い方・・・

第04話 光の泉（前書き）

今回ついにクルードが！

クルード

「ん？」

では、第四話どうぞ！

第04話 光の泉

カズヤ達は、未だ残っていた梯子を使い、穴の外へと脱出した。ちなみに、カズヤの覚醒は既に解けている。

「ふう〜・・・なんか無駄に疲れた気分・・・」

「あはは・・・」

溜め息をつくカズヤに、フィルミイは苦笑いを見せる。

「もうさっさとお宝取って帰ろうぜ」？

クルードに関しては、もうダルそうである。

「そうだね・・・多分この奥にあるよ。」

「何で分かるの？」

「多分お宝を取ってくるって言うのは名目。実質的にはさっきの戦いが試験なんだよ。だから、お宝を取りに来てる訳なんだし・・・その目の前に落とし穴を仕掛けた。そう考えられない？」

カズヤは二匹に説明をする。確かにゴールのすぐ目の前に罠を仕掛ければ、基本引っ掛かるだろう。

「なるほど〜！さすがカズヤ！」

「確かにそう言われてみるとそうだな・・・」

納得する二匹。

「でしょ？分かったら、早く行こう？もうゴールは近いよ。」

「うんっ！」

「ああ！」

こうして三匹は、先へと進んで行った・・・

「・・・あれ・・・？ツクミにクロウス？」

カズヤ達がやって来たのは、泉。そこには先客・・・ツクミにクロウスがいた。

「あら？貴方達。」

「試験は終わったのか？」

「いや、まだだよ。ねえ、この辺りに宝って無かったかな？」

フィルミイが聞いてみる。

「宝？・・・もしかして・・・その宝箱の事か？」

クロウスが指差した先には、緑色の小さな宝箱がある。

「開けようかと思ったんだけど・・・何が入ってるか分からないからちょっと怖くて・・・」

と、ツクミが言う。

「俺たちの試験の内容は、『神秘の森で宝を見つける』なんだよ。だから多分それが宝なんだと思うんだが・・・」

「なるほど、そういう事だったのね。」

「・・・一応調べてみるよ。」

「え？」

カズヤは、宝箱に近付き、触れてみる。すると・・・

「・・・っ・・・来た・・・！」

「時空の叫び・・・？」

「う、うん・・・」

(・・・あのポケモンは・・・)

見えたのは、今カズヤ達がいる場所に、レイリンが宝を置きに来ている光景。

「・・・なるほどね・・・」

カズヤは宝箱を開けた。すると、宝箱から出てきたのは、セカイイチ。

「レイリンらしいな・・・」

と言って、カズヤは苦笑いを見せる。

「セカイイチかあ・・・宝っていうからにはもうちょっと豪華な物

かと思っただけだなあ・・・」

フィルミィが少し落ち込む。

「まあ、レイリンらしいっちゃらしいんじゃないか？」

「それにしても・・・ツクミ達はここに何しに来たの？」

カズヤが気になったのは、ツクミ達の事だ。ツクミ達は、特に探検隊という訳では無い。ここにいる理由がよく分からないのだ。

「あ、えっと・・・『進化』・・・出来るようになってるかを・・・ね・・・」

「「進化？」」

カズヤとフィルミィは首を傾げるが、

「あゝ、進化な。」

クルードは知っているようだ。

「クルード、知ってるの？」

「ああ。進化ってのはな、この光の泉で何年か前は出来たみたいなんだけどな・・・進化すると、自分の姿が変わって、しかも強くなるんだ。」

「そ、そうなの!？」

フィルミィが目を輝かせる。

「ああ。今は出来ないんだけどな。時が狂い始めた影響みたいでな・
・時の流れが正常になった今も・・その内元に戻るんだろっけ
ど・・・今のところその兆しは無いみたいだな・・・」

「ふん・・・」

とりあえず相づちを打つカズヤ。

「俺も『オーダイル』に進化したいんだけどな。」

「『オーダイル』？」

「ああ。」

「これよ。」

ツクミが、カズヤとフィルミィに凶鑑を見せる。(なんで持ってた。)

「・・・へえ・・・こりやまた強そうな・・・」

と呟く。

「ねえ、僕の進化系ってどんなの？」

カズヤがツクミに尋ねる。

「えーっと・・・この二匹ね。」

そう言って、ツクミはその二匹の写真を交互に指差す。

「リザードにリザードン・・・へえ・・・リザードンになると翼が生えるんだ・・・」

（格好いい・・・）

密かにそう思っているフィルミィ。

「カズヤの進化系もいいよな・・・翼とかあるしな・・・」

と、クルードが呟く。

「ねえねえ！私は？」

「えっと・・・この七匹のどれかね。」

「七匹！？多いね・・・」

そう。イーブイの進化系は、七種類あるのだ。フィルミィは、その七匹の写真をしてみる。

「・・・進化するんだったら、これかな・・・」

そう言い、フィルミィが指差した（正確には前足）のは、肌色の毛の体の、所々から葉っぱを生やしているポケモン・・・『リーフィア』だった。

「へえ・・・フィルミィはこれがお気に入り？」

「うん！」

「私も進化したいから、貴方達が星の停止を食い止めてからは、こうしてこの、『光の泉』が元に戻ってないか、こうしてたまに見に来てるんだけど・・・今日も駄目みたい・・・」

「ふん・・・そうか・・・じゃあ帰る？」

「そうね・・・」

その言葉をキツカケに、五匹は帰ろうと、光の泉を後にしようとした・・・しかし、その時・・・

「・・・？ちよつと待って・・・？」

カズヤが何かに気付く。

「え？」

「ん？」

カズヤの声で、フィルミィ達も振り返る。

「あ！」

なんと、光の泉に光が射していたのだ。

「ま、まさか・・・！」

『……ここは光の泉……』

光の泉から、声が聞こえる。

「ふ、復活したの!？」

『……時が狂っていた事により、暫く光が失われていた……。しかし、それが無くなった事により、この泉に光は戻った……。』

「じゃ、じゃあ進化出来るの!？」

ツクミが嬉しそうに聞く。

『進化は出来る。』

「や、やったあ!」

ツクミは喜ぶ。

「良かったな!お前、ずっと進化したいって言ってたもんな!」

「ええ!」

クロウスの言葉を受け、早速と言わんばかりに光の射している部分に、ツクミは入る。

『……目覚める者達よ……。ここは光の泉。汝、新たな進化を求めるか?』

「ええ!」

『汝、リングマに進化するか、それでも良いか?』

「それでいいわ。」

『・・・目覚める者達よ・・・では、始めるぞ。』

光が強くなり、眩しい程になった光が、ツクミを包む。

「うわっ！眩しっ！」

カズヤ達は思わず手で光を遮る。そして、光が晴れるとそこにいたのは・・・

「・・・凄い！本当に進化したわ！」

リングマだった。

「ツ、ツクミなの・・・?」

「ええ。」

フィルミイの問い掛けに、前よりも少し低くなった声で返すツクミ。

「うわあ・・・」

カズヤは思った・・・この姿になってまで（♀が）強くなりたいかと・・・

「ねえ！私達もやってみようよ！」

「そうだね。」

「ああ！」

まずは、フィルミイが光に入る。

『・・・汝、新たな進化を求めるか？』

「うん！」

『・・・何に進化したいのだ・・・？』

「えっと・・・ツクミ、さっきのなんて名前だったけ？」

「リーファイアよ。」

「あ、そうそう。えっと・・・リーファイア！」

『リーファイア・・・リーファイアになるためには、道具が必要だ・・・』

「え・・・？」

『苔むした岩・・・これが必要だ・・・しかし・・・汝は今のままでは進化出来ない。』

「な、なんで？やっぱり苔むした岩が無いから・・・？」

『違う・・・根本的に・・・汝、一度未来のような場所に行った事』

があるか・・・？」

「え・・・？」

フィルミイは、未来に行った事がある。しかし、何故それが分かったのか・・・

『未来に行ったせいか、汝の周りの空間が、若干狂っている・・・そのせいで、進化が出来ない・・・』

「そ、そんな・・・」

フィルミイは少し落ち込む。

『そこにいるヒトカゲもだ・・・進化出来ない。』

「・・・僕も同じ理由・・・？」

『・・・そうだ・・・汝の周りの空間も少し歪んでいる・・・』

光の泉が言うには、カズヤもフィルミイも、この世界以外の世界にいた事がある。それにより、若干の空間の歪みが生じ、進化出来な
いと言っのだ。

「そうか・・・ちょっと残念だなあ・・・じゃあ、帰る？」

「そうだね・・・」

と、帰る雰囲気になった時・・・

「・・・あれ・・・？ちょっと待てよ・・・？もしかして、俺は進化出来るのか？」

そう言い出したのは、クルード。クルードは、別に未来に行ったとかは無い。

『汝は問題無く進化出来る。』

「よ、よっしゃあ！」

クルードは、光の中に入る。

「へえ、クルードが進化するのか・・・」

カズヤは興味深そうにその様子を見る。

『・・・汝、新たな進化を求めるか？』

「ああ！」

『汝、アリゲイツに進化すが、それでもいいか？』

「ああ！いいぜ！」

『・・・目覚める者達よ・・・では、始めるぞ。』

光の泉がそう言つと、さっきのツクミの時と同じように、クルードが眩しい光に包まれる。

「きゃっ！」

やはり皆手で光を塞ぐ。そして、それが晴れると・・・

「・・・か、変わってる!」

・
クルードの姿は、ワニノコから、アリゲイツへと姿を変えていた・

「よっしゃあ!すげえ・・・ちゃんと変わってる・・・」

クルードは、自身の姿を確かめるように見る。しっかりと、アリゲイツに変わっている。

「よし!このまま更にオーダイルに進化だ!」

と、張り切るクルード。しかし・・・

『・・・駄目だ・・・汝は今これ以上は進化出来ない・・・』

「え?」

『Lvが足りない・・・』

「がーん・・・」

残念ながら、クルードはオーダイルになれる程はLvは無かった・
・クルードは、カズヤやフィルミイに比べると、少し弱い。何故なら、一緒に未来に行った訳でも無いし、一緒に幻の大地に行った訳でも無い・・・

「しょうがない・・・もうちょっと強くなってから来るか・・・」

がつくしとしながら、クルードは皆の元へと戻ってくる。

「帰ったら、皆にクルードの事を説明しないとね。」

と、カズヤが言う。

「それじゃあ・・・帰ろうか・・・」

進化出来なかった事が、かなり残念だったのか、元気の無い声で、フィルミイがそう言う。

「まあまあフィルミイ。進化しなくても、僕はフィルミイの事大好きだから!」

そう言っで、カズヤはニツと笑って見せる。

「カズヤ・・・／／／私もだよ・・・／／／」

（相変わらずバカップルだ・・・）

（いつそ清々しいわね・・・）

（これが本物のバカップルか・・・）

と、思うクルード、ツクミ、クロウスであった・・・

第04話 光の泉 完

次回 めでたく卒業！

第04話 光の泉（後書き）

途中からクロウスが空気化してたような気がする・・・

クロウス

「俺がいらないみたいになってただろうが・・・」

んな事言われても・・・サブキャラだし・・・

クロウス

「サブキャラ言うな。」

ではまた次回。

第05話 めでたく卒業！（前書き）

今回短いです。かなり。

カズヤ

「長くなったり短くなったり・・・忙しい人だな・・・」

すみません・・・

第05話 めでたく卒業！

あれから、ツクミ達とは別れ、カズヤ達はギルドに帰ってきた。クルードの事を色々と聞かれ、皆に何があったかを教えた後、とりあえず皆地下二階に集まる事になった。

「じゃあそれでは、ウィングズ！卒業おめでとーう」

「「「「「「「「おめでとーう！！」「」「」「」「」」」」」」」」

レイリンに続き、皆がウィングズを祝福する。が、

「・・・うーん・・・」

「・・・なんか、なあ・・・」

イマイチパツとしない三匹。

「おや？どうしたんだい？嬉しくないのかい？」

ペリクは、三匹の様子を疑問に思い、尋ねてみる。

「うーん・・・あんまり実感が沸かないんだよね・・・そこまで大した事はしてないよーな。」

「何言ってるの！君達は、あの悪の大魔王を倒したんだよ！？喜ぶべきだよー！」

「なんで悪の大魔王倒した事知ってんの？」

カズヤに言われ、固まるレイリン・・・

「・・・さ、さあ？なんとなく・・・かな？」

苦し紛れにそう言い出すレイリン。苦し紛れとは言え、この嘘は酷い。正直下手くそだ。

（・・・ボロだしやすい上に嘘も下手くそって・・・嘘つくのにはまったく向いてないね・・・）

カズヤは呆れた表情になる。

「ほ、ほら！卒業すれば、ギルドの厳しいルールも関係無くなるんだよー!?」

ペリクが慌ててそう言うのと、それにフィルミイが食い付く。

「えっ!?それってもしかして、今度からは報酬がまるまる貰えるって事!?!」

もしそうならば、卒業した甲斐もあると言つもの。しかし・・・現実には甘くは無かった・・・

「いや、そこは今まで通りだよ。」

ペリクの言葉を聞き、思わずフィルミイはずっこける。

「ウィングズが卒業して立派に探検隊活動出来るのも、このギルド

のおかげ。だからそこは今まで通りなんだよ。」

と、ペリクが説明する。

「なんだそりゃ・・・あんま変わんねえな・・・」

「何言つてんだい、このギルドを卒業するだけで、その探検隊は一躍有名になれるんだよ！直接依頼が来る事も多くなるだろうし！・・・まあお前達は既に有名だろうけどな。」

「そうなの？」

「ああ。『星の停止から世界を救った探検隊』という事だな。トレジャータウンだと今までと大して変わり無いだろうが・・・他の街に行く時があったりすれば、かなり騒がれると思うよ？」

「そ、そうなんだ・・・」

ペリクの説明を聞き、三匹は苦笑いになる。まさかそこまで有名になつていようとは・・・といったところだろう。

「とにかく！ウィングズ、卒業おめでとう！」

「あ、ありがとう。」

フィルミイは苦笑いで返す。

「ところで、卒業したらもうギルドの部屋は使えないんだけど・・・どこか住む場所の宛はある？無いなら探してあげるけど・・・」

「うん」

「住む場所、かあ……」

「そんな所あるか？」

三匹は考え込む。そして、一番最初に声を出したのは、フィルミィだった。

「そうだ！カズヤ、クルード、私心当たりがあるよ！」

「そっか。フィルミイがそう言うなら大丈夫だね！」

（何が・・・？）

何が大丈夫なのか、よく分からないクルード。

「そう？なら大丈夫だね！では改めて皆で・・・卒業おめでとう！」

「卒業おめでとう!!!!!!!!!!」

その声に送り出されて、カズヤ達はギルドを後にした……

くサメハダ岩く

「ここだよ、ここ。」

フィルミイの案内でやって来たのは、サメハダ岩。

「ああゝ！なるほどね！」

「え・・・こんな崖つぶちで暮らすのか・・・？」

と、クルードが若干嫌そうに言う。確かに端から見れば、こんな所では暮らせそうに無い。が、しかし・・・

「大丈夫だよ、これを見て。」

フィルミイは、階段を隠してある茂みを退かす。

「ええっ！？こんな所に階段が・・・」

「さっ、入ろう。」

三匹は、中へと入っていく・・・

くサメハダ岩内部く

「凄えな・・・中はこんな空洞になったのか・・・水もあるし、確かにここなら大丈夫そうだな。」

ちなみに、水は端っこの方に溜まっている。綺麗なので飲んでも大丈夫だ。

「よし！じゃあ二匹とも！ここがウィングズの新たな出発点だよ！これからも、頑張って行こう！！」

「うんっ!!」

「ああ!!」

こうして、三匹は見事ギルドを卒業。新たな探検隊基地も立ち上げ、ウイングズとしての本格的な活動が、いよいよ始まる・・・

第05話 めでたく卒業！ 完

次回 新天地へ

第05話 めでたく卒業！（後書き）

次回からは、『空の頂編』に入ります。

カズヤ

「皆！絶対見てね！」

アニメの予告！？

第06話 新天地へ（前書き）

ギルド卒業後のウィングズの探検活動がスタート！

カズヤ

「記念となる最初の探検は！？」

それは本編をどうぞ！

第06話 新天地へ

「・・・・・・・・ん・・・」

太陽の光が射し込む中、一番に彼女は目を覚ました。

「・・・朝・・・だ・・・・・・・・ふあ・・・・・・・・」

彼女は小さく欠伸をする。そして、端の方に溜まっている水を、少し飲む。

「・・・・・・・・うんっ！」

彼女は、背伸びをする。（どうやって背伸びをするかは、猫の背伸びと同じと思ってい。）

「・・・・・・・・ふう・・・そっか・・・私達、ギルド卒業したんだっけ・・・」

彼女は、お気づきだろうか、フィルミイである。彼女達、チームウイングズは、昨日ギルドを卒業し、住む場所をサメハダ岩の中の空洞（以下表記：ウイングズ基地）に変えたのだ。

「・・・なんか久しぶりに普通に起きたなあ・・・」

ギルドにいた頃は、いつもゴンドの轟音に起こされていたので、なんだか今は爽やかな気分だ。

「カズヤとクルードは……まだ寝てるみたい……」

二匹は、まだベッドで寝ている。ちなみに、クルードはいびきを掻き、ベッドからはみ出ている。そんな様子に、フィルミィは少し苦笑いを見せる。

「起こすのも悪いし、ちょっと外に出ようかな……」

そう言い残し、彼女はウィングズ基地を後にした……

「トレジャータウン」

「……皆朝早くからお店開いてるんだなあ……」

フィルミィは、なんとなくトレジャータウンを見て廻る。散歩という奴だ。フィルミィは、そのまま交差点の方へ向かう……

〈交差点〉

「ん・・・？あ、フラン？」

「あら？フィルミィ！おはようですわ！」

フランに挨拶され、「おはよう」と返すフィルミィ。

「フラン、朝早いんだね？」

「あら？今はあまり早いとは言えないと思いますわ・・・」

「え？」

そう。実はフィルミィが起きた時間は、確かに朝ではあるが、大して早く無い。

「あらあら？もしかしてギルドを卒業してから、お寝坊さんになつてしまいました？」

「うう・・・そうかも・・・」

ウィングズのメンバーは、皆揃ってお寝坊さんのようだ。ギルドにいた頃早く起きたのは、ゴンドの仕事の賜物だろう。

「そうですね！それより、最近『空の頂』ってところへの道が開拓されたみたいなんですわ！」

「空の頂？」

聞き慣れない言葉に、首を傾げるフィルミィ。

「ええ、なんでも、そこにある『ロンクのカフェ』でやっている『プロジェクトP』っていうのがあるみたいで・・・」

ロンクのカフェとは、パッチールのロンクがオーナーを勤めるカフェ。場所は、交差点にいればすぐ分かる所にある、地下への階段が入り口だ。様々なサービスがあり、探検隊には人気らしいが、実はカズヤ達ウィングズは、一回も入った事が無い。

「ロンクのカフェ・・・あれの事だよね？でも、プロジェクトPって何なの？」

「プロジェクトPっていうのは・・・探検で余った道具をリサイクルして、未開のダンジョンを開拓するっていう物らしいんですわ。それによって、空の頂っていう場所に行けるようになったみたいですわね。」

「へえ・・・」

フィルミィは、興味深そうにフランの話聞く。

「ねえ、空の頂ってどんな所なの？」

フィルミィの質問に答えようとフランは口を動かす。（っていうか

「ただ噂話知ってた……」

「空の頂っていうのは……東に高くそびえる、天にも届くと言われている山らしいですね。」

「天にも届く!?!」

フィルミイは、フランの言葉に驚く。

「ええ、それで……あら?ごめんなさい、随分長く話し込んでしまいましたわ……」

「え?いや、大丈夫だよ。」

フィルミイは、フランに微笑んで見せる。

「あら、そうかしら……あ、じゃあ私はこれから依頼があるので、失礼させていただきますね。」

「うん、じゃあね!」

「ええ!」

その言葉を交わし、フランは探検へと出掛けて行った……

「空の頂、かあ……カズヤ達、そろそろ起きてるかな?」

フィルミイは、ウィングズ基地に戻る事にした……

くウィングズ基地く

「あ、フィルミィお帰り。」

そこには、既に起きているカズヤとクルードの姿があった。

「ただいま。もう起きてたんだね？」

「うん。」

「俺がカズヤを蹴っ飛ばしちまってな・・・」

「え・・・？」

クルードは、衝撃発言をする。

「蹴っ飛ばした・・・？ な、なんで？」

フィルミィは、意味が分からないので、聞いてみる。

「なんか分かんないけど・・・クルード、ここに来て寝相がだいぶ悪くなつたみたいでさあ・・・耳の痛みじゃなくて、体の痛みで現実の世界に引きずり出されたよ・・・」

カズヤは、呆れた様子でそう言う。

「その後こっぴどく叱られてな・・・」

「あ、あはは・・・」

本日二回目の苦笑いをするフィルミィであつた・・・

「ところで、フィルミィはどこに行つてたの？」

「うん？ちよつと散歩だよ。」

「ふん・・・」

相づちを打つクルード。

「あつ、そうだ！それでね、散歩の途中にフランから聞いたんだけど・・・」

「フランから？」

「うん。実はね・・・」

フィルミィは、カズヤとクルードに空の頂の事を話した。

「へえ、面白そうだな・・・」

「でしょ！だからさ、今日はその、空の頂つてところに行かない？」

フィルミイが、目を輝かしてそう言う。

「そうだね．．．」

そう言いながら、マップを取り出すカズヤ。

「えーっと、東の高い山と言うと．．．ここかな．．．？」

そう言つて、カズヤはその空の頂と思われる場所を指差す。

「これが空の頂かよ．．．周りにある山と比べると、突き抜けてんな．．．」

地図を見る限り、他の山の高さを突き抜けるように高い。

「えーっと？ 辿り着くには．．．ここの洞窟を抜ければいいみたいだな．．．」

カズヤが指差した所には、山の麓に出来ている洞窟がある。元々この洞窟は存在したが、開拓により開通され、空の頂に繋がるようになった。

「この洞窟は．．．『麗草の洞窟』って言うらしいけど．．．やっぱり不思議のダンジョンみたい。」

「なんでわざわざ不思議のダンジョンに道を開拓するかねえ．．．」

クルードが呆れた表情で、そう言う。彼らには知る余地も無いが、何故開拓する道が不思議のダンジョンなのか．．．恐らく、プロ

ジェクトPは、探検隊に出来るだけ探検してもらおうとした結果、空の頂に行く途中の道も、不思議のダンジョンがいい、という事になり、不思議のダンジョンだった麗草の洞窟を開通しよう、という事になったらしい・・・

「じゃあ、今日は空の頂を目指して、麗草の洞窟を抜けようか？」

「賛成！」

カズヤの提案に、フィルミィは元氣良く答える。

「俺も異論は無いぜ。」

クルードも、そう言う。

「よし、決まり！じゃあ、準備を済ませて早速行こうか。」

「うん！」

「ああ。」

こうして三匹は、トレジャータウンで粗方必要な物を揃え、麗草の洞窟へと向かった・・・

第06話 新天地へ 完

次回 ライバル登場？

第06話 新天地へ（後書き）

えゝ、言わずとも分かりますと思いますが、麗草の洞窟はこの作品オリジナルのダンジョンです。本編にはありません。

カズヤ

「そうなの？」

実際は一瞬で空の頂に辿り着きます。（正確にはシェ？ミの里に）

カズヤ

「あんま面倒増やさないでよ・・・」

ごめんね」

カズヤ

「反省する気あんのか・・・？」

では次回で！

第07話 ライバル登場？（前書き）

第七話です。

今回は・・・

カズヤ

「今回は？」

では、七話をどうぞ。

カズヤ

「聞かんかい！」

第07話 ライバル登場？

カズヤ達は、空の頂を目指す為、『麗草の洞窟』を抜けようとしていた・・・

「かえんほうしゃ！」

カズヤは、今戦っているポケモン・・・フシギバナにかえんほうしゃを放つ。

「・・・よし。」

フシギバナは、今の一撃でダウンした・・・

「ここは出てくるポケモンが結構強いな。」

と、カズヤが言う。このダンジョンは、草タイプばかりなものの、出てくる敵は、なかなか強い者ばかり。さっきのフシギバナや、ダーテング、メガニウム、ウツボット、ラフレシア、などなど、草タイプの最終進化系が目白押しだ。

「まあ、お前が言っても説得力無いけどな。」

そうあっさり言うクルード。確かに、その『結構強いポケモン』とやらを、カズヤはわりとあっさり倒しているので、あまり説得力は

無い。タイプが有利なものもあるが、やはりカズヤ自身がかなりの実力だからか。

「・・・私達の出番・・・無いね・・・」

「そうだな・・・」

敵はさっきからカズヤが一匹で倒している。

「そんな事無いよ。フィルミイはいてくれるだけで僕の力になるよ。」

「カ、カズヤ・・・／＼／＼」

カズヤの言葉に、顔を赤く染めるフィルミイ。

「毎度の事ながら、俺は・・・？」

相変わらず蚊帳の外なクルードであつた・・・と、その時、

「ん？クルード、後ろに敵がいる！」

「は？」

カズヤの声で、後ろを見ているクルード。すると、後ろにははっぱカッターを飛ばそうとしているトロピウスが・・・

「させるか！」

クルードはそれに気付くと、すぐさまれいとうビームをトロピウス

目掛け発射。見事に命中し、トロピウスの体は凍っていく。

「これでもくらいやがれ！」

その台詞を言うのと同時に、クルードはトロピウス目掛けてジャンプ。その間に、尻尾に水のエネルギーが溜まっていく。

「アクアテール!!」

凍っているトロピウスに、落下速度を利用して勢い付けた、アクアテールをぶつける。それにより、氷は砕け、トロピウスはその場に倒れた。

「やるね！クルード！」

「凄いよ！」

「へっ！ざつとこんなもんだぜ！」

ちよつと決め顔をするクルード。口にこそ出さなかったが、カズヤとフィルミィが、そこはいらなかった・・・と思っていたのは秘密だ。

「それにしても・・・この洞窟に生えてる草って、なんか綺麗だね・・・」

「まあ、確かにね・・・生えてる草の種類は、他の所となんら変わり無いんだけど・・・」

そう。この洞窟に生えてる草自体は、別にどこにでも生えているものだ。だが、この洞窟の地下には、特別な成分の水が溜まっている。植物は、そこから水を貰い、綺麗になっっているのだ。具体的にどう綺麗なのかと言うと、少し光っているのだ、キラキラと。

「でも、出てくるのは強いのはっかだけだな・・・」

そう。何度も言うが、この洞窟に出てくる敵は強い。カズヤ達は、そんなに苦勞せず倒れているようだが、それはカズヤ達が強いだけであり、やはり他のダンジョンに出てくる敵より強い。

「ふう・・・それに、結構このダンジョン長いよね・・・」

そう。ここは、かなり長い洞窟。通り抜けるのも一苦勞だ。

「まあ愚痴ってる場合じゃないか・・・早いところ・・・!？」

カズヤの動きが突然止まる。

「カ、カズヤ・・・?」

「聞こえた・・・」

「聞こえた？」

すると、カズヤは突然走り出した。

「え．．．？」

「へ．．．？」

突然の事に、しばらく啞然とする二匹。だが、少し時間が経つと、すぐにカズヤを追い掛け走り始めた．．．

（聞こえた．．．こっちから．．．悲鳴が．．．！）

そう。カズヤが聞こえたと言っていたのは、悲鳴。誰かの悲鳴が、カズヤには聞こえたのだ。フィルミィとクルードにはたまたま聞こえなかったが。

「．．．どこだ．．．！どこなんだ．．．！」

カズヤは走りながらあっちこっちを見て探す。

（．．．ん？あれは．．．！）

カズヤは、見つけた。一匹の座り込んでるポケモンが、メガニウムに超至近距離でソーラービームを放たれようとしている光景を。今まさに、攻撃されそうになっている方は、パニック状態になっていて、かわせそうにないし、反撃も出来そうに無い……

「させるか！」

カズヤは走り出す。そうしてる間に、ソーラービームのチャージが終わったのか、そのエネルギーを一気に放とうとする。そして、もう駄目だと思ったのか、攻撃されようとしている方は、目を瞑る。

「っ……！！！」

……しかし、いつまで経っても攻撃は来ない……。不思議に思い、そのポケモンは目を開く。すると、そこにはさっきまでいなかった筈のポケモン、ヒトカゲの背中が見える……。そう、カズヤがいたのだ。メガニウムは、その場に倒れてしまった……

「あ……」

「えーっと、君、大丈夫？」

カズヤは振り返り、とりあえず安心させる為に、笑みをみせておく。

（種族は……。確か、キルリアだったっけ？）

カズヤが思う通り、そのポケモンはキルリア。

「え……。えっと……。あり、がとうございます……」

そのキルリアは、明らかに顔が赤くなっている。が、当然カズヤはそんな事にしない。っていうか気付かない。

「ほら、立てる？」

カズヤは、手を差し出す。そのキルリアは、カズヤの手を借り、立ち上がる。

「えっと・・・助けてくれて・・・ありがとうございます・・・」

キルリアは、敬語でカズヤにそう言うが、なんだかその敬語がぎこちない気がするのはいけい。

「いいっていいって。それより一体何がどうなってあんな事に？」

カズヤには分からなかった。何故やられそうな時に、座り込んでたのか・・・

「えっと、実は・・・私、この洞窟を抜けて、空の頂つてところに行きたかったんですけ、ど・・・」

（目的地は僕達と同じかあ・・・）

「そうしたら途中で、フシギバナとメガニウムに遭遇して・・・」

「フシギバナ？」

さっき見たところ、フシギバナはいないように見えたが・・・

「あ、ほら、あそこで倒れてる・・・」

キルリアが指差した先を見てみると、確かにフシギバナが倒れている。

「ああやって、なんとかフシギバナは倒したんですけど・・・」

（メガニウムを相手にしながらフシギバナを倒した、のか・・・實力は結構あるみたいだな・・・）

「でも、あのフシギバナ、倒れ際にねむりごなを出してきたの・・・じゃなかった、出てきたんです・・・」

今若干敬語が崩れたような気がしたが、カズヤは気にしない。

「それで、まさか倒れ際に攻撃してくるとは思わなくて・・・ねむりごなをくらっちゃって・・・」

「寝てしまったと。」

「はい・・・それで、起きたら、メガニウムが目の前でソーラービームをチャージしていて、体中が寝てしまう前よりも痛んでいて、どうすればいいのかわかんなくなってる・・・」

「はあ・・・なるほど、それでパニック状態になってたのか・・・」

起きたら、いきなり目の前に自分よりも大きいポケモンがいて、しかもそんな協力的な技を放とうとしていたら、パニック状態になるポケモンも多いだろう・・・

「まあ、怖かったよね・・・とりあえず良かったね、無事で。」

そう言つて、微笑んで見せるカズヤ。まあ無論、フィルミイに見せる笑顔と比べると、霞んで見えるくらいだが・・・

「は、はい！本当に助かりました・・・！」

「そういえば、空の頂を目指してるって言つてたよね？」

「はい、まあ・・・」

「なら、一緒に来ない？」

「え？」

カズヤは考えた。ここにこのキルリアを置いて行くのは、カズヤの性格的にもあまり出来ないし、置いて行つて、さっきみたいな目に遭わせるのも嫌だ。そう思い、とりあえず空の頂まで一緒に行こうと、誘う事にした。

「僕達も空の頂を目指してるんだ。」

「僕“達”？他にもいるんですか？」

「うん、まあね。」

すると、キルリアはカズヤから顔を背け、小声で・・・

「なんだ、一匹だったら良かったのに・・・」

そう呟いた。

「……？あの……」

「はっ……いや、何でも無いですよ!？」

「は、はあ……」

と、その時……

「おい!」

「カズヤ!」

「あ、フィルミィ、クルード。」

フィルミィとクルードが、カズヤに追い付いて来た。

「はあ……まったく、どうしたんだ?いきなり走り出して……
って、誰だ?そのキルリア……」

クルードは、キルリアの存在に気づく。

「えっと、実はね……」

カズヤは、これまでの経緯を説明した。

「そっか……」

「で、一緒に連れて行きたいんだけど・・・どう？」

「私は大丈夫だよ。」

「俺も異論は無いぜ。」

「君は？」

カズヤは、キルリアに聞いてみる。

「あ、えーっと・・・（あのイーブイ・・・どういう関係なの・・・？）

キルリアは、一瞬イーブイ・・・フィルミィを睨んだ。フィルミィは気付かないが。

「どうする？」

（でも、あのイーブイがどんな関係だったとしても・・・！）じゃ、じゃあ私も一緒に行きます。」

「そう？じゃあ決定だね。」

「私はフィルミィ！宜しくね！」

「俺はクルードだ。宜しくな。」

「僕はこのチームウイングズのカズヤ！宜しく。」

「えっ？ウイングズって・・・もしかして、あの星の停止から世界

を救ったって言う・・・」

「ん？ああ、知ってたんだ。」

「そ、そりゃあ有名ですから・・・」

ウィングズは、世界中で有名だ。実際、知らない者の方が少ない。

「あ、私はルナ。宜しくお願いします、カズヤさん。宜しく、フィルミィ、クルード。」

「うん。宜しく。」

「えっ・・・？（なんか今カズヤと分けられたような・・・）うん、宜しく。」

「ん・・・？（なんか今俺、フィルミィとカズヤ、別々にされなかつたか・・・？）あ、ああ。宜しく。」

フィルミィとクルードは、今自分達だけ別々にされたような気がしたが、気のせいという事にした・・・

「じゃ、さっさと洞窟抜けようか。」

「うん！」

「ああ。」

「はい！」

こうして、キルリアのルナも加えて、四匹で空の頂へと向かう事になったのだった・・・・・・

第07話 ライバル登場？ 完

次回 爆弾発言

第07話 ライバル登場？（後書き）

えゝ、出てきました。
初登場のルナです。

ルナ

「どうも・・・」

素っ気無いな・・・七話を見れば分かりますが、好きな者（物）はとことん好き。嫌いな者（物）はとことん嫌い。興味無い者（物）はとことん興味無い、というかなり極端思考なキャラです。七話見れば分かると思いますが、カズヤに惚れてます。

ルナ

「あんたには関係無いでしょ。」

ひでえ・・・

では、新キャラなのでキャラ紹介を・・・

名前、	ルナ
種族、	キルリア
性別、	♀
年齢、	14
性格、	極端
所属、	不明
一人称、	私

超極端な性格のキルリア。麗草の洞窟で、ピンチのところをカズヤに助けてもらい、一目惚れ。カズヤの誘いを受け、一緒に空の頂について行く事にする。好きなものは好きだが、嫌いなものは嫌いだし、興味無い事はとことん無い。戦闘に関しては、意外と強いが、ピンチな状況になると、冷静な判断が出来なくなってしまう。フィルミイをライバル視する事になる。

といった感じです。

ルナ

「・・・」

ちょっと、なんか言ってよ・・・

ルナ

「知らない。」

・・・彼女は興味が無いようです・・・

あ、ちなみに、空の頂のストーリーはだいぶ変わりますよ。原作のキャラで、出ないキャラがいたり・・・まあ、詳しくは次回で！

第08話 爆弾発言（前書き）

カズヤ

「今回のタイトルなんなんだ・・・？」

文字通りだけど・・・

カズヤ

「・・・？」

では、第八話スタートです。

第08話 爆弾発言

前回、極端すぎる思考のキルリア、『ルナ』を助け、そのルナも加えて、空の頂に行く事に決めたカズヤ達。そしていよいよ洞窟を抜けた先には……？

「着いた！」

彼らは、空の頂の麓に位置する里、『シェイミの里』へと辿り着いた。

「えーっと、ここは……シェイミの里だっさ。」

「へえー！シェイミって、種族の事かな？」

そうフィルミイが考えていると、

「ようこそー！」

「え？」

そう声を掛けてきたのは、四足歩行の、かなり小さい、白い体をし、背中には緑の草に、ピンク色の花が生えているポケモンだった。

「君は？」

カズヤが訊ねる。

「私は、空の頂の案内人、シェイミのメルアと申します。」

「へえ．．．メルアって言うんだ。案内人．．．空の頂には案内人がいたんだね。」

「はい。昔はここは観光名所として有名だったんですが．．．その後落石でここへの道が閉ざされてしまい、しばらくは私達もひっそりと暮らしていました。でも、最近道が開拓されて、また色々な方々が来るようになったんですよ！」

シェイミのメルアは、嬉しそうに話す。

「ねえ、ところで早く山を登りたいんだけど．．．」

まるでメルアの話など興味無さそうに、ルナが言う。

「おいおい．．．」

「駄目だよルナ。ちゃんと話は聞いてあげないと．．．」

クルードは呆れ、カズヤは注意をする。

「ご、ごめんなさい．．．カズヤさん．．．」

カズヤの注意に対しては、即刻謝るルナ。

「いえいえ、いいですよ、貴方達も山に登りに来たんですよ？」

「うん。まあね。」

「先程も、えーっと、プロジェクトPご一行様が、来てくださってもう帰られましたが、色々あって大変だったんですよ・・・」

「プロジェクトPって・・・ああ、あのロンクのカフェの・・・」

「何が大変だったんだ？」

「ええ・・・マスクッパ達や、ベトベトン達がとにかく大変でして・・・まあ一緒にいたチームフロンティアのおかげで何とかなっただすけどね・・・」

「ふーん・・・色々あったんだね・・・」

「あはは・・・」

苦笑するメルア。

「では、登山を開始しましょうか。」

こうしてカズヤ達は、メルアの案内の元に、空の頂に登る事になった・・・

「空の頂」

「皆さん、山登りは初めてですか？」

メルアが訊ねる。

「僕達は・・・トゲトゲ山とかなら登った事はあるけど・・・あそこは大して高くないしな・・・ルナはある？」

「私は・・・まあ、名前がついてない山ぐらいなら・・・」

名前がついてない山「小さい山、という事になる。

「なるほど・・・空の頂はとっても高いので、覚悟してついて来て下さいね！」

「わ、私大丈夫かなあ・・・」

「大丈夫ですよ。一合毎に休憩地点があるので。疲れたら無理せず、それらの場所で休んで行きましょう。」

「そ、そっか。なら大丈夫かな。」

と、そんなこんなで一合目まで彼らは登って行った・・・

〈一合目〉

「・・・カズヤさん・・・ちょっと疲れました・・・」

そう言うのは、ルナ。

「ん？そう？大丈夫？」

「は、はい・・・なんとか・・・つとと。」

ルナはバランスを崩し、カズヤにもたれ掛かる。

「おつとつと・・・ほんとに大丈夫？」

カズヤは、肩を支えてルナを受け止める。

「すみません・・・少し休ませて下さい・・・」

と、ルナが言う。フィルミィ、クルード、メルアは、その様子を心配そうに伺う。

「じゃあ少し休憩しようか・・・」

カズヤが座れる所を探す為に、ルナから目を離す。そして、その間にルナは、フィルミイを見る。

(ルナ・・・?)

フィルミイとルナの目が合う。

「・・・クスツ・・・」

ルナが、少し笑う。

(ルナ・・・?え?今の・・・何・・・?何か今の笑い方、含みがあるような・・・)

少し疑問に思うフィルミイだが、取りあえず気のせいという事にしておいた。

「しかしお前も案外体力無いな・・・」

と、言いながら、クルードがルナに近付く。

「・・・ええ。」

(・・・なんか、返事が素っ気ない気がするんだが・・・)

クルードも、若干疑問に思うが、やはり気のせいという事にしておく。

「ん？あの辺休めそうだよ。」

と、カズヤは適当に休める場所を探し、そこにルナが座り込む。

「すみません、私のせいで・・・」

「メルア、この山って、やっぱり結構高い？」

「はい、まあ・・・うん、一合目で疲れちゃうと結構きついですがね・・・」

確かに、山登りにおいて、一合目で疲れるときついかもしれない・・・ただ、カズヤには少し疑問に思うところがあった・・・カズヤはルナに近づく。

「ねえ・・・」

「は、はい・・・？」

「ルナ・・・本当に、疲れてる・・・？」

「え・・・？」

「カズヤ・・・？」

「どういう事だ？」

フィルミイ達は、カズヤとルナの様子を見る。カズヤは思った。ルナは実は疲れている演技をしてるだけなんじゃないのか？と。

「なんていうか・・・さつきから動き方がぎこちないって言うか・・・
疲れてる演技をしてるだけ・・・に見えるような・・・」

「え・・・な、何を・・・」

「「「・・・？」」「」」

フィルミィとメルアは首を傾げ、クルードは不思議そうな表情をする。

「・・・正直に言って・・・疲れてる？疲れてない？」

カズヤは、ルナに言い詰める。カズヤには、なんとなく演技をしているように見えたのだ。

「う・・・」

ルナは、何とも言えない表情にする。

「・・・疲れて・・・ません・・・」

ルナは観念して、白状した。そう、元々疲れてなどいないのだ。

「ええっ!？」

「疲れて無いのかよ!」

「ど、どという事ですか!？」

フィルミィ達はやはり驚く。

「何で嘘をついたの・・・」

「う・・・それは・・・その・・・えっと・・・」

ルナは、少し目線を逸らす、カズヤはじつとルナを見る。

「・・・あの・・・私・・・私・・・私・・・カズヤさんの事が好きなんです！！！！」

「へ？」

「・・・え？」

「は？」

「・・・？」

上から、カズヤ、フィルミイ、クルード、メルアの反応である。まさかの爆弾発言を聞けば、まあこの反応になるのは無理無いただろう。

「だから・・・カズヤさんの気を向かせる為に・・・」

ルナは少ししゅんとする。

「・・・え？いや・・・いやいやいやいやいや！！」

とんでも無い爆弾発言に、パニくるカズヤ。

「え？何！？今・・・え？今、君・・・僕の事・・・好きって言う」

た・・・？」

確認するようにカズヤが言う。

「は、はい・・・／／／／」

「・・・・・・・・」

取りあえず冷静になろうとするカズヤ。

「・・・ルナ・・・悪いけど、僕にはフィルミイが・・・」

と、言いかけたその時・・・

「ちよつ、ちよつと待って！？どういう事！？カズヤの事が好きって・・・！？」

「そのまんまの意味よ。」

「駄目だよ！！カズヤの恋人は私なんだからね！！！！」

そう言い切るフィルミイ。なんか若干怒ってる・・・

（あんまり想像したく無かったけど・・・やっぱりそういう仲だったのね・・・だったら・・・！）だったら！私がカズヤさんの隣を奪うまでよ！！」

「な、何言ってるの！？そんな事駄目・・・っていうかそれ以前に無理だからね！！カズヤは私の事を一番大事に想ってるって言ってくれたし！それは私だって同じだし！！」

「あんたがどう思ってるかなんて私には関係無い！！カズヤさんは私の者に・・・いや、私がカズヤさんの者になるの！！」

「だ〜から〜！！」

他の三匹を他所に、言い争いを始める二匹。カズヤは、巻き込まれないよう避難している。

「・・・モテる男は大変だな・・・」

「カズヤさん、随分モテるんですね・・・」

「好きでこんな状況になった訳じゃ・・・」

溜め息を吐くカズヤ。

「はぁ・・・なんなんだ・・・僕にはフィルミイが・・・とか言っても、ルナは聞く耳持たずって感じだし・・・」

「簡単に退いてくれる様子でもねえな・・・」

「あはは・・・」

メルアは、そんな光景を見て、苦笑いした・・・

一方その頃・・・

く???く

どこかの空間・・・

「・・・奴等は今、空の頂に登っている・・・ロア、お前はそこに

行き、奴等の様子を見てこい・・・始末出来るのなら、そこで始末してしまつて構わん・・・」

そう指示するのは、漆黒の体をしたポケモン・・・片方しか見えな
い目から、静かな威圧感を感じる・・・

「・・・僕でいいの・・・？もうちょっと強い方がいい気がするん
だけど・・・ラウスとかに任せれば・・・」

ロアと呼ばれたその、頭に葉っぱを生やした四足歩行のポケモン・
・ベイリーフは、僕、と言うわりには高い声で、その指示してくる
ポケモンにそう言う。

「他の四天王は別の任務についている・・・いや、あいつは・・・
アルスはいるが・・・」

「ふゝん・・・四天王最強の男がいるじゃん。なんで僕なの？カズ
ヤつてポケモン、凄く強そうじゃん。僕だつて一応女の子なんだよ
？あんまり顔とかに傷は付けたく無いんだよ・・・」

つるのムチで手鏡を持ち、自分の顔を写し、自身の顔の様子を伺う
仕草を見せるロア。そう。このベイリーフのロアは、[♀]。

「女の子、か・・・それはその一人称を変えてから言え。」

「ひつどいなー。女の子が僕って言っちゃいけないの？」

少し不服そうにするロア。

「・・・何でもいい、さっさと行け。」

「えゝ？結局アルスは何で行かないのさゝ．．．アルスが行ったら確実に仕留められるよ？」

「あいつを出すのはまだ早い．．．それにあいつ自身も、他の三匹がやられないと動いてくれないだろう．．．」

「そんなのゝ、アンタの強さがあれば、脅して動かさせる事ぐらい出来るんじゃないのゝ？」

「．．．悪いが、部下を脅迫するつもりは無い．．．」

「はあ．．．妙なところでちょっと優しいんだね、アンタは．．．分かったよ、行けばいいんでしょゝ、行けばゝ．．．怪我したらアンタの責任だからねゝ？」

「．．．いいから早く行け．．．」

「はいはい、行ってきますよゝつと．．．」

そう言い残し、ロアはその場から一瞬で姿を消した．．．

「．．．まさか本当に時の破壊が防がれるとはな．．．だが、次の手は打つ．．．まずは、様子見だ．．．」

そう言い残し、その漆黒の体をしたポケモンも、その場から一瞬で姿を消した．．．

第08話 爆弾発言 完

次回 異変

第08話 爆弾発言（後書き）

カズヤ

「ま、まさかこんな事になるうとは・・・」

ね？タイトル、文字通りだったでしょ？

カズヤ

「まあ、ね・・・」

で？どっちを取るつもり？

カズヤ

「そんなの！フィルミイに決まってるでしょうが！でも・・・あの様子だとルナはなかなか引き下がってくれそうに無いよな・・・」

あはは・・・まあ頑張れ。

カズヤ

「何をだよ・・・」

ではまた次回で！

第09話 異変（前書き）

タイトル通り、異変が起きます。

カズヤ

「何それ？」

それは本編で。では、

フィルミィ

「第九話、スタート！」

台詞盗られた・・・

第09話 異変

ルナの爆弾発言・・・あれから、フィルミィとルナは若干険悪な感じになりながらも、カズヤ達はシェイミのメルアの案内の元、空の頂を登った。しかし・・・その“異変”は、七合目を過ぎた辺りから起き始めた・・・

「・・・おかしい・・・」

カズヤは、襲い掛かって来ていたオニドリルを倒しながらそう呟く。

「カズヤもそう思う・・・？やっぱりおかしいよね・・・」

フィルミィも、カズヤと同じ事を考えていたようだ。

「おかしい？何が？」

「あれだよ、なんか・・・この辺りのポケモン・・・殺気が凄まじいっていうか・・・」

ルナの疑問に、クルードが答える。そう、さっき・・・七合目を過ぎた所から、出てくるポケモン達の殺気が凄まじいのだ。強さ自体は変わっていないのだが、放つ威圧感が全然違う。

「メルア、この辺はいつもこんな感じなの？」

「い、いえ・・・こんなに殺気立ってるポケモンをここで見るのは初めてです・・・」

メルアもこんなのは初めてだと言う。

「強さ自体は変わってないから普通に倒す事は出来るんだけど・・・うーん・・・（なんだろうな・・・なんか・・・嫌な予感がするな・・・）」

と、その時、

「きゃっ!？」

フィルミイが何かを察知して、その場から慌てて飛び退く。すると、さっきまでフィルミイがいた場所を、きあいだまが通り過ぎた。

「あ、危なかった・・・」

全員、きあいだまがやって来た方向を見る。すると、そこにはやはり、殺気立っているリングマがいた。

「リングマ・・・よし!」

フィルミイは、でんこうせっかでリングマに近付く。すると、リン

グマもフィルミイに向かって突撃していく。そして・・・

「フィルミイさん！リングマのアームハンマーです！」

メルアが叫ぶ。リングマは走りながら、重ね合わせた両手に力を溜め、丁度フィルミイが正面に来た時に、降り下ろした。

「当たらないよ！」

しかし、フィルミイは寸前でかわし、そのまま後ろに回り込む。そして、すいへいぎりを決め、さらに追い討ちのたいあたりを決め、リングマは吹っ飛ぶ。そのまま、気絶した。

「ふう・・・」

「フィルミイもどんどん強くなってるね。」

「俺の知らぬ間にな・・・」

「凄いですね！フィルミイさん！」

メルアは、フィルミイの戦いに感激する。ちなみに、ルナは興味が無さそう。

「でも、あのリングマもやっぱり凄い威圧感だった・・・正直ちょっと怖かったよ・・・」

素直な感想を述べるフィルミイに、

「ふうん？あんなのが怖かったの？」

と、ルナが若干嫌味のように言う。

「う．．．お、女の子はね！ちょっと怖がりなくらいがちょうどいいの！」

「ん？私別に怖がりなのが駄目だとは一言も言っていないけど？」

「う．．．」

「ルナ！あんまりフィルミイを苛めないで！怒るよ！」

（いや、既に若干怒ってるだろ．．．）

カズヤの様子を見て、クルードは心の中で突っ込む。

「はい．．．すみません。」

そう言つて、引き下がるルナ。

（．．．なるほど．．．それなりに仲はいいって事ね．．．）

「フィルミイ、大丈夫？」

「ん．．．私は大丈夫だよ．．．」

（な〜にいい雰囲気になってんのよ！あ〜もう！イライラするっ！）

ルナは、表にこそ出さないが、心の中で怒りが沸き上がっている。

「あの・・・そろそろ先に進みましょう?」

「ん?ああ、ごめんね。そうしよう。」

こうして、三匹は更に登って行く・・・

く八合目く

「ねえ皆、ちよつといいかな。」

先頭のメルアの次を歩くカズヤが、振り返り、そう言う。それに気づき、メルアも歩みを止めて、振り返る。

「さつきからポケモン達が凶暴になってる事について、どう思う?」

カズヤが聞き、皆は暫く考える。そして・・・

「うん・・・それに関しては、私もおかしいと思う。でも、私にはその原因だとか、そういうのは予想がつかないや・・・」

「俺、考えんの苦手なんだよ。」

「まあ勝てるならいいんじゃないですか？」

上から、フィルミィ、クルード、ルナの順に発言する。

「・・・メルアは？」

「えっ？わ、私ですか？うん・・・そうですね・・・」

メルアは暫く考える。

「・・・今まで、ポケモン達があんな事になる事はありませんでしたし・・・あまり考えたくはありませんが、これは人為的に誰かが・・・という事も考えられます・・・」

「人為的、か・・・僕はね、さっきからなんか嫌な予感がするんだよね・・・」

「嫌な予感・・・？」

「うん・・・なんていうか・・・なんだろうな・・・確信は無いんだけど・・・でも・・・なんとなく、ね・・・」

カズヤは、飽くまで勘でこの発言をしている。しかし、カズヤは今まで色んな事を経験してきた。その経験から来ている勘なのだろう。

「・・・でもよ、ここで考えててもしょうがねえんじゃないか？頂上まで言ったら何か分かるかもしれないし・・・今さら降りるってのも出来ないだろ。」

「……それもそうか……しょうがない、じゃあ、早く登っちゃおう。」

「そうだね。」

「私もそれがいいと思います。」

「という訳でメルア、また案内よろしく。」

「はい！」

こうして彼らは、頂上目指し、さらに進んでいく……

く九合目への道のりく

「……エビワラーか！」

頂上を目指して歩いていたカズヤ達に、野生のエビワラーが立ち塞がる。

「くらえ！」

エビワラーに向かって、かえんほうしゃを放つかズヤ。が、エビワラーはそれを容易くかわす。まあそんな事はカズヤも予想済みだ。

「はああっ！」

カズヤは、かえんほうしゃをかわして隙が出来たエビワラーに、ドラゴンクローを決め、さらに至近距離から再びかえんほうしゃを放つ。これでエビワラーは倒れた。誰もがそう思った。カズヤが野生のポケモンと一騎打ちだったら、カズヤがあっさり倒してしまうだろうと思ったから、フィルミィ達も特に行動を起こさなかった。しかし・・・

「んな！？立ってる！？」

そう。あの攻撃を受けて、エビワラーは立っていたのだ。エビワラーは、カズヤ・・・では無く、驚いて啞然としているフィルミィに、マッハパンチを仕掛けた。

「はっ！ま、まもる！」

なんとか気を取り直せたフィルミィは、まもるでバリアーを張る。それにぶつかっているエビワラーに、

「くらいやがれ！」

クルードは、横からアクアテールを決める。そして、それによりエビワラーは吹っ飛ばされ、ルナの目の前に・・・

「はああっ！」

ルナは、エビワラーにマジカルリーフをぶつける。それにより、エビワラーは倒れた・・・と思いきや、再び立つ。

「なっ!?!」

ルナは、まさかまだ立つとは思っていなかったもので、少しパニックになる。そんなルナに、エビワラーはきあいパンチを放とうと・・・

「させません!」

したが、メルアが放ったエナジーボールが、横から飛んできて、エビワラーに命中。それは防がれた。さすがに体力が尽きたのか、エビワラーはその場に倒れた・・・

「やっと倒れたよ・・・一体何なんだ? 八合目を過ぎてから、急に強く・・・」

「なんだかこのエビワラー、痛みを感じてる気がしなかったぜ・・・?」

「どういう事なの・・・?」

カズヤ、クルード、フィルミィは、倒れたエビワラーを見つめる。

「大丈夫ですか! ルナさん!」

「え、ええ・・・ありがとう・・・」

ルナは、助けてもらったので、とりあえず礼を言っておいた。

「皆、この先は、このエビワラーみたいな敵が出てくるようになるのかもしれない。注意して行こう。」

「うん。」

「ああ。」

「はい。」

「分かりました。」

（・・・嫌な予感・・・当たらないんだけど・・・）

く九合目く

「皆さん、ここまで来たら、頂上はもうすぐそこです。ここで少し休憩したら、一気に登りきりましょう。」

「うん。」

皆、それぞれ適当な所に座り、休み始める。その中で、カズヤはある事を考えていた。

（・・・さっきのエビワラー・・・結局あの後、敵は出なかったけど・・・どう考えてもおかしい・・・何かが・・・何かが、起きている・・・）

カズヤはそう考える。

（でも、何が起こってるんだ・・・？それはまだ分からない・・・）

と、その時、

「皆さん、そろそろ休憩は終わりにしましょう。」

と、メルアが呼び掛ける。それにより、皆が立ち上がる。が、カズヤが立ち上がらない。聞こえていなかったのか。

「カズヤ？」

「・・・え？」

「休憩は終わりだつて、行く？」

「あ、ああ、ごめんごめん。行こうか。」

「じゃあ、出発しましょう。」

く頂上への道のり」

「・・・ねえ、やっぱりおかしいよ。」

カズヤの声で、皆が立ち止まる。

「この辺り・・・なんていうか・・・色が紫がかってるっていうか・・・」

そう。あちこちの風景、とにかく、目に見える物全てが、薄く紫色になっているのだ。

「そういえば・・・」

何故ここに来るまで気が付かなかったのか。それは、頂上に進むにつれて、少しずつ色が変わっていったから。一気に変われば気が付くだろうが、こう少しずつ変われば、気付くのは時間が掛かる。

「皆・・・多分、いや、間違はなく頂上に何かある！急ごう！」

フィルミィ達も了承し、彼らは走って頂上に向かっていった・・・

く空の頂 頂上く

「ついた・・・」

「敵ポケモンが出なかったのは、運が良かったぜ・・・」

「でも・・・」

「ここ、何・・・？」

「いつもはこんなじゃありません・・・」

彼らが目にしたのは、さつきよりも濃く紫色が掛かった光景。青い空も、紫色に見える。

「・・・ん・・・？誰がいる・・・」

カズヤは、奥の方に誰かの存在を確認する。四足歩行のポケモンが、こちらに背を向けて佇んでいる。

「・・・あなた・・・誰なの・・・？」

カズヤ達はそのポケモンに近づき、フィルミィが声を掛ける。

「ん？もう来たんだ・・・」

そのポケモンは、カズヤ達に振り返る。

「こんな高い山の頂上で会うなんて・・・運命感じちゃうなっ」
て、まあ知ってただけだね。」

そう言葉を発するのは、ベイリーフ。

「とりあえず自己紹介しないとね。僕は四天王のロア。こう見えても女の子だよ？間違えないでね。」

「四天・・・王・・・！？」

頂上でカズヤ達を待っていたのは、四天王、ロアだった・・・

次回 四天王 〽 口ア 〽

第09話 異変（後書き）

カズヤ

「四天王・・・!？」

さあ、いよいよカズヤ達と四天王が、再び対峙！まあ前とは違う奴ですが。

詳しくは次回で！

第10話 四天王 〽ロア〽（前書き）

四天王と対峙したカズヤ達は、どうするのか！

第10話 四天王 〜ロア〜

空の頂頂上・・・そこで待ち受けていたのは・・・自身を四天王と名乗る、ロアという名のベイリーフだった・・・

「空の頂頂上」

「四天王・・・王・・・!?」

「そ、四天王」前に会わなかった?ラウスっていうポケモンに。」

「ラウス・・・」

カズヤ、フィルミィ、クルードは、自身の記憶を探る。そして、一番最初に気付いたのは、カズヤだった。

「思い出した・・・北の砂漠で襲ってきた、あのゾロアークか・・・!」

そう。ラウスは、カズヤ達が北の砂漠に時の歯車の搜索に行った時に、カズヤ達を襲ってきたポケモン。その強さは、当時のカズヤの覚醒状態でも、まったく歯が立たなかった。

「あいつが言ってる四天王っての・・・お前が言ってる四天王ってのは、同じだ、って言いたいのか・・・?」

「そだよ？まあ僕は四天王の中では一番弱いんだけどね」

「てへへ」、と苦笑いを見せるロア。

「カズヤさん、四天王って・・・？」

ルナは状況が掴めないので、カズヤに訊ねる。

「前に僕達の事を襲ってきたんだ・・・その時は見逃してもらえたけど、まったく齒が立たなかった・・・」

カズヤが悔しそうな表情をする。

「それにしても、やっぱりナイトメアゾーンってやっぱり凄いな」
「どんどんポケモンが凶暴になってくよ」

ロアは笑顔でそう言う。それに食い付いたのは、メルアだった。

「もしかして・・・空の頂をおかしくしたのは貴女ですか!？」

「ん？そだよ？ちょっとした道具を使って、ナイトメアゾーンっていうのをこの空の頂頂上付近に発生させたんだ」

「ナイトメアゾーンってなんだよ・・・？」

クルードが聞き返す。

「ん・・・これ言っているのかなあ？」

ロアはしばらく悩んだ様子を見せる。そして、

「・・・まいっか♪ナイトメアゾーンっていうのはね、その空間の中にいるポケモンを眠らせて、悪夢を見せるんだ♪それも、そのポケモンの精神的な部分をつくような、ね・・・そんでもって、ある程度悪夢を見たポケモンは起きて、あまりに酷い悪夢を見た衝撃で凶暴化・・・凄いでしょ？」

「・・・？だつたら、僕達が平気なのは・・・？」

「あゝ、これね、野生にしか効果が無いみたい。」

このナイトメアゾーンは、野生のポケモンにしか効果は無い。何故かと言うと・・・

「実はこのナイトメアゾーンを作る為の道具、“ブラッディナイトメア”はね、まだ改良中。野生の方が、精神が弱い部分があるんだ。それに、わりと簡単に寝てくれるしね。野生のポケモンは寝たい時に寝るからね。だから、改良中でも効くって訳。」

そう言いながら、ロアは懐からつるのムチで、血の赤色と、闇の黒色が混じったようなエネルギー状のボールを見せる。大きさは、野球ボールぐらいだろうか。

「ちなみにね、このナイトメアゾーン・・・外から見てもまったく分からないよ？みやぶるとかを使ったら分かるかもしれないけどね。」

「分からないって・・・」

メルアが疑問の声を挙げる。

「まあ要するに、この空間は外から見たら透明って事だよ。中に入
って、中心部に近づく事でようやく分かるんだ。内側から見ると、
中心部だけは紫色の空間になってるからね。」

だからだ。中心部に近づくに連れ、辺りがだんだん紫色になってい
ったのは。

「あと、ナイトメアゾーンにかかったポケモンはね、ナイトメアゾ
ーンの中心部近くに来ると、凶暴になるだけじゃなくて、実際に強
くなるんだ」なんでも、中心部近くに来ると、そのポケモンの限界
を越えても戦えるようになるのか。凄いよね」

にこにこしながらそうロアは言うが、言っている事は最悪だ。

「だから頂上に近づくに連れて、敵も強くなってたんだ・・・」

フィルミイが、納得した様子を見せる。

「ちょっと待て！そんな事してたら、その凶暴化させられてるポケ
モンが死ぬよ!？」

カズヤが叫ぶ。限界を越えてでも戦い続けた者の先に待ってるのは、
死。当たり前だ。そうならない為に、限界というのはある。それが
無くなってしまうば、死ぬまで活動を続ける事になる。

「お前・・・自分のやってる事が分かってんのか!？」

クルードも叫ぶが・・・

「そうだね、死ぬよ・・・それがどうかしたの？」

一瞬、背筋が凍り付くような声になるロア。

「なぐんで、言っただよ、お偉いさん達はね・・・。」

今度は、やはり一瞬だが、ロアは寂しそうな表情を見せる。

「え・・・？」

その様子に気づいたフィルミィは、疑問の声を挙げるが、ロアはすぐに元の表情に戻る。

「僕がやってるのはね、親孝行ってやつだよ？これの何がいけないの？」

「親孝行・・・？こんな・・・こんな事をするのか・・・？」

カズヤが静かに声を挙げる。

「こんな事、か・・・そうだよ、僕がやってるのは、“こんな事”さ。」

「お前ら四天王の目的は何なんだ・・・？」

「悪いけど、それは答えられないよ。そんな事言ったら怒られちゃうよ。」

ロアは、カズヤの問い掛けに答えようとしない。その時、

『ゴオオオオオ!!!!』

「カズヤ・・・!」

「カズヤ!」

「カズヤ、さん・・・!?!」

「これは・・・!?!」

カズヤの足元から、天高く火柱が昇る。この事を知らないルナとメルアは、驚いている。

「・・・」

その火柱を、ロアは無言で見つめる。火柱が消えると・・・

「・・・ロア・・・今すぐ、ナイトメアゾーンを消せ・・・!!」

静かな怒りを見せる、覚醒状態のカズヤがいた・・・

「・・・へえ・・・それが君の覚醒かあ・・・」

ロアは、興味深そうにカズヤを見る。

「うん・・・嫌だ、って言ったら?」

「その時は・・・力づくでも、だ・・・!」

「そつか・・・じゃあ、嫌だ。」

ロアがそう言い放った瞬間、カズヤは地面を蹴り、双龍紅蓮爪を構え、ロアに攻撃を仕掛けた。

「うわっ！つと・・・」

ロアは、その攻撃をつるのムチで受け止める。

「なっ・・・！？」

鏢迫り合いになりながらも、目を見開くカズヤ。まさか、つるのムチで受け止められるとは思っていなかった。

「もっつ、早いな。僕そんなスピードについて行けないよ！」

愚痴を言いながらも、つるのムチでだんだんと双龍紅蓮爪を押し始める。

「くっ・・・！」

カズヤは、これ以上の鏢迫り合いは危険だと判断し、一旦後ろに飛び退く。

「くそ・・・どうなってるんだ・・・」

「カズヤ、多分あのロアってポケモンは、スピードは大して無い分、パワーが尋常じゃ無いんだと思う・・・」

と、フィルミィが説明する。自分から接近して来ないところを見る

と、確かにそんな気はする。

「・・・ルナ、メルア、お前達は逃げる・・・」

「「え・・・？」」

「お前達を関係の無い事に巻き込む訳にはいかない。メルアは下に降りたら、なんとか観光とかの奴等に、上に行かないように伝えてくれ。ルナ、お前もだ。」

「・・・分かりました！」

自分がいても足手まとい。そう悟ったメルアは、急いで山を降りていった。

「ルナ、早くしろ。」

「わ、私は・・・」

ルナは、俯いて考える。ここで自分は逃げていいのか？確かにルナは、この件にはまったく関係無い。関わる必要は無いのだ。

「・・・無い・・・無いけど・・・でも・・・！」

ルナは、顔を上げ、カズヤの方を向く。

「私・・・私も、戦います！！」

「・・・！？何を言って・・・！」

カズヤが、表情に驚きを見せるが、ルナは続ける。

「私だって！カズヤさんの力になりたい！それに、ここまで一緒に来ましたし、もう無関係なんかじゃありません！-」

ルナは、真っ直ぐな目でカズヤを見つめる。

「・・・分かった。何を言っても無駄そうだしな・・・ルナ、あいつが死なないように手加減してくれるかは分からない。気を付けるよ・・・」

「はい！」

四匹・・・カズヤ、フィルミイ、クルード、ルナは、ロアを睨み付ける。

「あ、話終わった？急に戦闘始めたかと思ったら、急に話し始めちゃうんだもん。待ちくたびれたよ！」

「それは悪かったな。だったら、今度こそ始めるか・・・」

「よし、来い！」

空の頂の頂上で、今、四天王ロアとの戦いの火蓋が落とされた。圧倒的なパワーを持つロアを相手に、カズヤ達は勝利する事が出来るのか・・・

第10話 四天王 〽ロア〽 完

次回 対決！ロア！！ 頂の頂上での死闘

第10話 四天王 〽ロア〽（後書き）

次回、ロアとの戦いがスタート！

第11話 対決！ロア！！ 頂の頂上での死闘（前書き）

前書きは無いです。

カズヤ

「だったら書くな。」

第11話 対決！ロア！！ 頂の頂上での死闘

「くらえ・・・！」

最初に動いたのはカズヤ。カズヤは、ロアにかえんほうしゃを放つ。

「きゃああ！怖～い！」

そうふざけた様子で言いながら、かえんほうしゃに向けて、エナジーボールを放つロア。炎タイプのかえんほうしゃと、草タイプのエナジーボール。どちらが有利かは、目に見えている。が、しかし、かえんほうしゃはエナジーボールに相殺された。

「なに・・・！？」

さすがに、驚きを隠せないカズヤ。

「ちっ・・・双龍紅蓮爪をつるのムチで受け止めた事と言い・・・かえんほうしゃをエナジーボールで相殺した事と言い・・・あいつは化け物か・・・？」

カズヤは苦い顔をする。

「カズヤ！多分パワーで勝負しても勝てない！ここはスピードで攪乱していこう！」

「ああ・・・！」

フィルミィに返事をするのと同時に、カズヤはかげぶんしんを発動する。たくさんの分身が、ロアを囲む。

「うわあ・・・カズヤ君がいつぱいだねえ・・・」

「フィルミィ！クルード！ルナ！今の内に攻撃しろ！」

「任せろ！れいとうビーム！！」

「スピードスター！」

「シャドーボール！」

クルード、フィルミィ、ルナは、かげぶんしんに当たらないようジャンプして、上から狙い撃つように技を放つ。

「マジカルリーフ！」

ロアはなんと、自身の全方位にマジカルリーフを放つ。そのマジカルリーフは、全てのかげぶんしん、そして、れいとうビーム、スピードスター、シャドーボールを、全て消滅させ、かげぶんしんの中に混じっていたカズヤ、さらに、それぞれの攻撃の先にいた、フィルミィ達にヒットする。

「ぐっ・・・」

「あう・・・！」

「ぐああー！！」

「きゃあ！」

カズヤは、炎タイプだった事もあってか、ダメージは少な目で済んだ。それでもマジカルリーフにしては多い方だが。フィルミィ、ルナは、それなりにダメージを負う。問題はクルードだ。クルードにマジカルリーフは効果抜群。かなり効いている。四匹は、とりあえず一旦引いた。

「あんなマジカルリーフの放ち方ありなの！？」

ルナが叫ぶ。確かに、普通のポケモンにはあんな芸当出来ないだろう。ルナもマジカルリーフは使えるが、あんな放ち方は無理だ。

「クルード、大丈夫か？」

「あ、ああ・・・」

マジカルリーフをくらった腹を押さえながら、辛そうにクルードは返事をする。その腹からは、少量の血が流れていた。

「あちゃー、仕留め損ねちゃったか」。全方位に放つと、威力下がっちゃうんだよね。」

（あれで威力がダウン・・・！？）

ロアの言葉に、フィルミィは目を見開く。

「生半可な攻撃じゃあいつの全方位マジカルリーフに防がれる・・・何か、攻撃を当てる方法は・・・」

「全員分の最大級の技を、一気に叩き込むってのはどうだ？さすがにあいつでも、押し返すのは無理だと思うが・・・」

と、クルードが提案する。

「・・・スピードは遅いだろうから、かわされる心配は無さそうだが・・・それに、確かに押し返される可能性も低そうだ・・・だが、それで奴がやられなかったら、その後の戦闘に支障が出る・・・」

確かに、最大級の技を放った直後の戦闘は、動きのキレが悪くなるなどの、悪影響が生じるだろう。

「そうか・・・」

「話してないで、戦ってよー!」

ロアは、そう言いながら、カズヤ達に向かって凄まじいスピードのエネルギーボールを放つ。

「!」

速すぎる上に、不意打ち。かわせないと判断したフィルミィは、咄嗟に前に出て、まもるを発動する。が・・・

『パリン...』

「え・・・?」

まもるは一瞬で割れ、そのままエネルギーボールはフィルミィに直撃し、フィルミィを吹き飛ばす。威力が高すぎて、まもるじゃ守りき

れないのだ。

「フィルミィ！！クルード！ルナ！少し時間稼ぎしてくれ！」

「分かった！」

「・・・はい！」

ルナが少し迷った素振りを見せたが、今はそんな場合じゃない。承諾した。一方、フィルミィに駆け寄るカズヤ。フィルミィは、横たわって気絶している。

「ちっ！（後はこれともう一つだけだが、しょうがない！）

カズヤは、舌打ちをしながらトレジャーバッグを開け、復活の種を取り出し、フィルミィの口の中に放り込んだ。

「・・・ん・・・」

フィルミィは目を覚ます。

「あ・・・私・・・」

「フィルミィ、大丈夫か？」

「う、うん・・・」

一方・・・

「回復なんてさせないよ!」

ロアは、カズヤとフィルミイに向けて、マジカルリーフを放つ。

「させない!!」

ルナはサイコネシスで、マジカルリーフの軌道を反対に変える。

「うええっ!?!?そう来るの!?!」

スピードが無いロアはかわせない。しかも、さすがに咄嗟の事だったので、更に技を出して打ち消す、という事は思い付かなかったらしい。そのまま、マジカルリーフはロアに直撃する。

「うああっ!!」

ロアは悲鳴を挙げる。

(えっ・・・?あれぐらいでそんなに・・・?)

ルナは疑問に思う。それはクルードも同じだ。今のが、かなり効いているように見えた。いくらロアのマジカルリーフが強力とは言え、効果今一つだ。そこまで効くとは思えない。

「いったあ・・・」

本当に痛そうな声を挙げるロア。未だに体制を元通りに出来ていな

い。その時、

「待たせたな。」

「もう大丈夫だよ!」

カズヤとフィルミイが、戦線復帰する。

「カズヤ! 思ってたんだが・・・あいつ、防御力がかなり低いんじゃないかと思うんだ・・・」

「何・・・?」

クルードの発言に、疑問の声を挙げるカズヤ。

「さっき、マジカルリーフをサイコキネシスで跳ね返して当てたら、かなり痛そうでした・・・」

「・・・まさか・・・スピードだけじゃなく、防御面も低い・・・?」

「あゝあ、バレちゃったな・・・しょうがない・・・」

なんとか体制を立て直したロアが言う。

「そうだよ、僕の防御力、特殊防御力は紙みたいに低い。それにスピードも君達が予想してる通りに低いんだ。」

この言葉で、カズヤ達は希望を持つ。防御面が弱い。攻撃さえ当たればいいのだ。しかし・・・

「だが、“攻撃は最大の防御”を体現したような奴だからな・・・」
カズヤ達の攻撃は、正直言って、ロアの技の威力には敵わない。技で打ち消されるとどうしようも無い。

「しかも、あの全方位マジカルリーフは厄介だ・・・」

あれがあると、生半可な攻撃は通らない。

「それにしても、さっきのマジカルリーフで僕の顔が少し傷付いちやったよ・・・ちよつと怒ったよ!!」

そう言つと、ロアの足元から緑色のエネルギーが噴出される。

「なっ・・・!？」

「嘘・・・!？」

「マジかよ・・・!!」

「・・・!」

カズヤ、フィルミィ、クルードが苦い顔で驚きの声を挙げる。ルナに至っては、驚きで声も出ない。そして、緑色のエネルギーが落ちて着いてくると、そこに見えたのは・・・

「女の子の顔に傷付けると、怖いんだよ・・・?」

緑色のオーラをまとったロアが立っていた・・・覚醒だ。しかも、

頭の葉っぱに光のエネルギーが溜まっていつてる。

「あれは・・・！」

カズヤはそれに気付いた。『ソーラービーム』だ。

（こんな攻撃特化してる奴のソーラービームはまずい！）

カズヤの頭に危険信号のようなものが走る。

「さよなら・・・ソーラービーム！！！！！」

ロアは、標準をルナにして、ソーラービームを放つ。何故ルナを狙ったのか。それは、マジカルリーフで顔が傷付いたのは、ルナがサイコキネシスで跳ね返したからだ。

「ちっ！」

この攻撃を予想していたカズヤは、啞然としているルナの元に急いで駆け寄り、ルナを抱えてソーラービームを避けた。ソーラービームは、そのまま他の山がある方向に向かって飛んで行く。そして・・・大爆発を起こした・・・

「な・・・に・・・！？」

「嘘、でしょ・・・？」

「山が・・・！」

別の山の頂上付近が、ソーラービームによって消し飛んだ。

「・・・おいおい・・・ありゃあ、地図を書き換えなくちゃいけないぞ・・・?」

（なんなんだ、この威力は・・・いくら普段からあんなに攻撃力が高いとは言え・・・あれは有り得ない・・・!）

カズヤはそう判断する。

「あっちゃ・・・やり過ぎちゃった・・・そのキルリアも消し損ねた・・・」

後半は小声で、ロアはそう言う。

「派手にやっちゃったから、怒られちゃうかもな・・・もういいや、今回は帰ろっと。」

そう言い、ロアはカズヤ達に背中を向ける。すると、クルードは止めようと前に出ようとするが・・・

「待て。」

カズヤに止められる。

「深追いするな・・・向こうから引いてくれるならむしろ助かる・・・」

「・・・分かったよ・・・」

渋々引き下がるクルード。ロアは、そのまま少し歩くと、目の前に

出現した闇の空間に入り、姿を消した。その後、その闇の空間も消える。さらに言うと、頂上の色も、紫色から元通りとなった。仕掛けたロアがいなくなった事により、ナイトメアゾーンの効力が切れたのだろう。

「・・・大丈夫か、ルナ。」

カズヤは、未だに抱えていたルナを、地面に降ろす。

「は、はい・・・」

ルナは未だに落ち着けずにいる。

「カズヤ・・・今のソーラービーム・・・」

「ああ・・・あの山の頂上付近が、消し飛んだな・・・」

そう言いながら、カズヤはソーラービームが直撃した山を見る。

「あいつの攻撃力・・・一体どうしたらあんな攻撃力になるんだ・・・」

カズヤが考える中、ようやく落ち着いたルナが、口を開く。

「誰かの力を借りてる、とか・・・」

「誰かの力を・・・？」

カズヤは思い出してみる。あのソーラービームを。すると、引っ掛かる部分があった。ソーラービームは、吸収した光を集束させ、光

線状にして放つという技。その為、その光線は目映い光になる。しかし、あの時は気付かなかったが、今になってみると、あのソーラービームからは、少しだけ、『闇』を感じた・・・

「もしそうだとしたら、誰かが四天王の背後にいるって事・・・？」

「その可能性は十分にあるな・・・」

皆の間にしばらく沈黙が走るが、その沈黙をクルードが破る。

「・・・今ここで考えててもしょうがねえよ。取りあえず帰ろうぜ・・・」

「・・・それもそうだな・・・」

フィルミィとルナも、賛成する。

「よし、山を降りるぞ。話はそれからだ・・・」

そう言い、カズヤは先頭を歩き始め、それに続いてフィルミィ達も歩き始めた・・・

第11話 対決！ロア！！ 頂の頂上での死闘 完

次回 かつての親友

第11話 対決！ロア！！ 頂の頂上での死闘（後書き）

カズヤ

「あのソーラービーム・・・」

強力だったね・・・

カズヤ

「いくら何でも、あそこまでの威力は・・・」

では、また次回で！

第12話 かつての親友（前書き）

今回はほぼ説明と回想だけです。しかも思ったより長くなってしまいました。

フィルミィ

「ええ〜・・・」（――；）

あ、ちなみに今回は残酷な表現があるので、お気をつけ下さい。

フィルミィ

「お気をつけ下さい！」

では、第12話すたーそ！

フィルミィ

「最近それやらなかったのに！！！！！」

第12話 かつての親友

く????

「・・・ただいま。」

そこに現れたのは、ベイリーフ・・・ロアだ。

「ロア、か・・・」

それに反応したのは、ロアに空の頂に行くよう指示したあの存在だ。

「ロア・・・少し派手にやり過ぎだ・・・」

「ごめんごめん、顔を傷つけられたもんだから、ちよつと頭に来ちゃつて。」

「・・・まあいい・・・次の指示を待て・・・」

「はい」

そう返事をする、ロアは一瞬でその場から姿を消した・・・

「・・・しかし・・・あれはどこに行ったのか・・・」

そう呟く者の目は、まるで何かを探しているようだった・・・

ロアとの激闘の末、山を降りる事にしたカズヤ達。カズヤ達は、麓のシェイミの里に辿り着いた。

くシェイミの里く

「あ、皆さん！」

そう言い走ってきたのは、メルアだ。

「メルア！良かった、無事だったんだね。」

「はい。おかげさまで・・・」

メルアは、カズヤ達に安心させるように笑みを見せる。

「それで、少し話があるんですが・・・」

「話？」

メルアの発言に、カズヤ達は頭に“？”マークを浮かべる。

「はい。カズヤさんに言われた通り、上であつた事を里の皆に伝え
たんです。あのロアっていうベイリーフが現れた事も・・・」

「うん。」

「そしたら・・・そのロアってポケモンを知ってるかもしれない、
って言つたシェイミがいたんです・・・」

「「「ええ!?!?!」」」

「・・・?」

ルナ以外が、皆驚く。

「そ、そのシェイミって!?!」

カズヤは、メルアに問い詰める。その時、カズヤ達の後ろから声が
した。

「えっと・・・私の事です。」

その声を聞き、カズヤ達は後ろに振り返る。そこには、メルア・・・
いや、一般的なシェイミよりも、一回り小さいシェイミがいた。

「・・・小さい・・・」

「放っておいて下さい!」

そのシェイミはフィルミイの第一声に、顔を赤らめながら怒る。

「君が・・・ロアの知り合いかもしれない、っていう・・・？」

「はい・・・あ、私の名前はシャロンと言います。」

「ん？ああ、僕はカズヤ。宜しく。」

「私はフィルミイ！宜しくね！」

「俺はクルードだ。宜しくな！」

「・・・私はルナ、宜しく。」

ルナの自己紹介が淡泊な気がしたが、まあそれは置いておく事にし、本題に入る事にした。

「それで・・・君とロアが知り合い、って・・・」

「あ、はい・・・メルアが山から降りてきて、それでベイリーフのロアの話聞いた時、まさかと思ひまして・・・あの、ロアの一人称ってなんでしたか？」

「一人称？うん・・・」

カズヤは、自分の記憶を探る。

「・・・・・・・・ああ、そういえば、『僕』って言ってたね。」

「やっぱり・・・」

シャロンは、少し声のトーンが低くなる。

「私が知ってるロアの一人称は、『僕』。その辺でも一致します・・
」

「「「「「・・・!?!?!?!」」」」」

シャロン以外の全員が驚く。ちなみに、詳しい話はカズヤ達が降りてから、という事になっていたので、メルアも驚いている。

「・・・なあ、シャロンとロアは、どういう知り合いだったんだ？」

クルードが訊ねる。

「私とロアは・・・親友でした・・・少なくとも、私は親友だと思っ
ていました・・・」

「親友・・・」

またまた衝撃の事実に、この場が静かになる。

「実は私は、この里の生まれじゃ無いんです。」

「え？そうなの？」

フィルミイが聞き返す。

「はい。私の故郷は、この大陸にはありません。別の大陸にあった
んです。」

ここで、カズヤには少し引つ掛かる点があつた。

(・・・あつた・・・？過去形・・・？まさか・・・)

シャロンは話を続ける。

「私は、別の大陸にある村、『草響の村』で生まれました・・・」

「なんだよ？その草響の村って。」

「草響の村は、大きな国・・・リーフ・エルシアに属する、とても小さな村なんです。」

「ふん・・・」

クルードは、取りあえず納得した。

「村と言っても、ポケモン達がありません所と、ポケモン達がそれなりの数集まっている集落とがあつたんです。私は、そのポケモン達がありません所^{ポケモン}で生まれ育ちました・・・多分、それが影響したのか、私は人見知りの性格になりました・・・」

「今はそんな風には見えないけど？」

「一応それなりに直りましたからね・・・」

ルナの疑問に、苦笑いしながら答えるシャロン。

「私が9歳になった時の話です・・・私を含めた私達の家族は、集落の方に引つ越しました。でも、そんな集落に人見知りの私が行つ

たら・・・私がいじめの対象になるのには、そう時間は掛かりませんでした・・・」

「ええっ！」

フィルミイが驚く。

「そんな時でした・・・」

・・・

『おい、お前最近引越してきた奴だろ？』

『え・・・？あ、あの・・・えっと・・・は、はい・・・』

外を散歩していたシェイミ・・・子供の頃のシャロンに声をかけたのは、キノココ。横には、モンメンと、スボミーもいる。

『お前さー、なんか暗いよなー。』

『そうそう、もうちょっと明るくして欲しいよねー。こっちも気が滅入るし。』

『あんまり姿見せないで欲しいよー。』

『・・・！』

上から、キノココ、モンメン、スボミーの順にそう言われ、シヨックを隠せないシャロン。でも、言い返せる訳でも無い。

『う、うう・・・』

『外出てくんなよー!』

『早く帰れ!』

『何で引つ越して来たんだよ!』

『・・・うう・・・!』

幼稚ないじめだが、幼いシャロンにはかなり精神的に来るので、涙目になってしまう。その時、

『何してんの?』

『ん?あ、僕女じゃねーか。』

やって来たのは、一匹のチコリータだ。

『何してんの、ってお前、見て分かんない?』

『うん・・・いじめてるように見えるけど・・・』

『当たり前!』

そうキノココが言った瞬間、キノココのすぐ目の前の地面に、何か

が降り下ろされた。そのキノコは、降り下ろされた物を見ても
と、どうやらチコリータが発動したつるのムチのようだ。つるのム
チが当たった地面は、穴が空いている。

『いじめは・・・良くないよ?』

にこにこしながら、そのチコリータは、キノコ達を見る。キノコ
コ達の方は、少し・・・いや、かなり怯えている。

『お、おい!行くぞ!』

『こ、この怪力女!』

『うわああああ!』

各々の台詞を残し、キノコ達は走って去って行った・・・

『・・・ふう、まったく・・・大丈夫?君。』

『あ、は、はい・・・』

『僕はロア!あ、女の子だからね!』

『え、えつと・・・』

突然自己紹介をされ、戸惑うシャロン。

『ねえ、君の名前は?』

『あ・・・えつと・・・シャロン、です・・・』

『シャロンかあ．．．よし！覚えた！ね、一緒に遊ばない？』

『え？』

．．．．．

「そんな事が．．．」

「その後は、とても楽しい日々でした．．．ロアのおかげで、皆の輪に入って行けたし、ロアも、とっても私に良くしてくれました．．．でも、そんな日々も長くは続かなかったんです．．．」

「．．．？どういう事．．．？」

「私がロアと会ってから一年後、つまり、私が10歳の時です。国の方から、草響の村を取り壊し、そこにホテルを建てたいという要請が来たんです．．．まあ、今思えば強制的なものでしたが．．．」

「ホテル？またなんでホテルを．．．」

「草響の村があったのは、海際。空気は綺麗だし、更に、近くの森を伐採して、そこにテーマパークを建てるとか．．．」

「なんだそりや．．．」

「・・・なるほどね・・・要するに、その国の上の方に最低な奴がいた、って話でしょ？」

ルナの言葉に、皆は苦笑いになる。

「でも、草響の村は皆の古里なんです。そう簡単に譲れる訳もありません・・・草響の村の村長は、それを断りました。」

「それが正しいと思うよ。」

「しかし、国の方も中々諦めてくれませんでした・・・何日も、何カ月もその状態が続き、ついに国の方が痺れを切らしたんです・・・」

「どうなったの？」

「・・・」

シャロンは、少し言いにくそうになる。

「・・・国は・・・いつまで経っても退かない草響の村の村民を、国の中で極秘に殺戮処分する事にしたんです・・・」

「「「「「!?!?」「」「」」」」」

全員が一番の驚愕の表情になる。

「ちょっと待ってよ！おかしくない！？いくら退かないからって・・・！殺さなくても・・・！」

「・・・要するにあれだな？お偉いさんには腐ってる奴がいるって事だろ？」

クルードは、静かに怒りを露にする。

「誰がそんな事を決定したのかは、分かりません。でも、草響の村の村民は、飽くまでも正当な理由、で殺されました・・・」

「・・・シャロンは、逃げれたんだよね・・・？」

フィルミイは、やはり怒りが表情から伺える。

「はい・・・殺戮処分が実行された時、私はロアの家遊びに行つてました・・・しかし、途中で処分隊が玄関から突入してきて、それをロアの両親が止めようとしたんです・・・そして私とロアに、『裏口から逃げろ』と・・・」

苦い表情で話すシャロン。

「私達は躊躇いました・・・でも、ロアの両親の呼び掛けで逃げる事を決意して、私はロアと二匹で裏口に走り始めました・・・でも、その途中に聞こえたんです・・・ロアの、両親の悲鳴が・・・」

「「「「「！！」「」「」」」」

・・・・・・

『お父さん!!お母さん!!』

両親の悲鳴を聞いたロアは、思わず駆け戻る。

『ロ、ロア!』

シャロンが呼び止めようとしても、ロアは走った。そして・・・

『・・・!!』

ロアは見てしまった・・・両親のメガニウムと、フシギバナが殺され、倒れているのを・・・その姿は、血塗れで、所々焼かれていた・・・その近くには、処分隊の、ヒダルマ、ヘルガーが二匹ずついる。ヒダルマは手にナイフを持ち、ヘルガーは口でナイフを食わえている。そのナイフには、血が・・・恐らく、炎技で燃やし、弱らせたところをナイフでとどめを刺したのだろう。

『あ・・・ああ・・・』

ロアは、その場に崩れ落ちる。そして、ロアも処分しようと近寄る処分隊。

『ロア!』

いてもたってもいられなくなったシャロンは、ロアを追い掛けて来たが、その光景に絶句した・・・

『お、とう・・・さん・・・おか・・・あ・・・さん・・・あ・・・ああ・・・いや・・・嫌・・・』

まともにくらったシャロンは、くらった瞬間に気絶し、場所が海に近い場所だったせいか、そのまま海に放り出された・・・

・・・

「私はあの後、気がついたらこのシェイミの里で手当てされていたんです・・・奇跡的に生きてたみたいで、何とか助かりました・・・どうやら、私はこの山の近くにある海岸に流れ着いていて、たまたま外に出ていたシェイミに見つけて貰ったみたいなんです・・・」

「「「「「・・・」」」」」

皆は何も言えない。あまりに酷すぎる。それが今の皆の心境だ。

「あの後、ロアがどうなったかは分かりません・・・」

「・・・だから・・・」

「フィルミィ・・・？」

「だから、あの時ロアは悲しそうにしてたんだ・・・」

「あの時・・・？」

「うん・・・」

・
・
・
・
・

『なぐんで、言っただよ、お偉いさん達はね……………』

・
・
・
・
・

「あの時のロア…………一瞬だけど、凄く悲しそうだった…………」

「…………」

カズヤは暫く黙る。

「あの後、草響の村は開拓されてしまったみたいで…………今はもうありません…………」

「…………教えてくれてありがとう、シャロン。この事は、帰ってからもっと深く考えてみるよ…………」

「…………はい…………」

「それで、ルナはどうするの?」

「え? ああ、私は………ウイングズに入りたいです!」

カズヤ、フィルミィ、クルードは、少しの間静まる。そして……

「……ええええっ!? 何で!?!」

別に嫌な訳では無いのだが、やはりビクリしてしまうものである。

「そりゃあ、好きなカズヤさんと一緒にいたいから……//」

顔を赤くし、もじもじしながらカズヤにくつつこうとするが……

「ちょっと!」

フィルミィの体当たりに阻止される。

「いったあ!! 何すんのよ!」

「何すんのよ! じゃないよ! ウイングズに入るのはいいけど、カズヤをたぶらかすのは許さないよ!……!」

「うるさいわね!! あんたには関係無いでしょ!!」

「大有りだよ!!」

また言い争いを始めるフィルミィとルナ。そしてカズヤは苦笑い、クルードは呆れている。また、その様子を見ていたメルアとシャロンも苦笑いだ。

「・・・どこでたぶらかすなんて言葉知ったんだろう・・・」

カズヤのそんな呟きも、聞こえるはずは無かった・・・

「じゃあメルア、シャロン、色々とお世話になったね。」

「またいつか来るね!」

「はい!」

「いつでも待っています!」

カズヤとフィルミィの言葉に笑顔で答える、メルアとシャロン。

「あんまり思い詰めんなよ、シャロン。」

「はい、私は大丈夫です。心配してくれてありがとうございます!」

シャロンは、心配させないように満面の笑みを見せる。

「・・・！お、おう。その笑顔、忘れんなよ！」

クルードは、シャロンにニカッと笑う。

「は、はい！」

「カズヤさん、そろそろ行きましょう？」

「分かった分かった。」

苦笑しながら、ルナにカズヤは答える。ちなみに、ルナは常時カズヤの横にいる。“横”だ。“隣”ではない。隣にいと、フィルミイが怒るからだ。ルナとて、ずーっと言い争いを続ける気は無いので、隣にくつつきに行くのは、ここぞと言う場面だけにしている。

「じゃあね！」

「バイバイ！」

「元気だな！」

「・・・それじゃあ。」

こうして、カズヤ達は新たな仲間、ルナを加えて空の頂を後にした・・・色々な事を思い、感じながら・・・

「今回も色々あったわね、シャロン・・・・・・・・シャロン？」

「え？」

「貴女、顔真つ赤だけど・・・」

「ええっ！？あ、いや、あの・・・な、何でも無い！」

そう言うと、逃げ出すようにシャロンは走り始めた。

（・・・クルードさんって優しいな・・・／／／／）

などと思いながら・・・

「・・・？」

よく分からず、メルアは首を傾げていた・・・

第12話 かつての親友 完

次回 探検家「グラデイス」

第12話 かつての親友（後書き）

フィルミィ

「許せないよ、あんなの・・・」

ああ、殺りk

フィルミィ

「何でルナはあんなにカズヤにくっついて来るの!？」

そっ ちいいいい!!!??

第13話 探検家「グラデイス」(前書き)

十三話更新！

カズヤ

「最近更新ペース遅くなってない？」

う、うるせーぞ・・・

第13話 探検家「グラデイス」

(・・・なんだ・・・？ここ・・・)

カズヤは、不思議な空間の宙に浮いていた・・・

(・・・！風景が・・・！？)

突然風景が変わる。その風景は、いつの日か夢で見たあの廃墟だった・・・

(・・・これは・・・確か・・・前に夢で見た事が・・・って、これ夢なのか・・・？)

カズヤは辺りをキョロキョロと見回す。すると、空に黒い光と紫の闇が見えた。黒い方は不思議な事に、黒いにも関わらず光に見えた。

(・・・なんか妙にリアルだよな・・・もしかして、時空の叫びの一種なのか・・・？いや、でもあれは触れた物の過去や未来が見えるはず・・・いや、もしかしたら説明しきれないところがあるのかも・・・)

などと考えていると、黒い光と紫の闇がぶつかりあった。

（前この風景を見た時もだったけど・・・戦ってる・・・？ポケモン、なのか・・・？）

そう考えている内に、風景がぼやけてくる。

（ちょ、ちょっと！これで終わりなの！？もう少し、見たいよ・・・！）

しかし、そんなカズヤの願いも叶うはずは無く、カズヤは目が覚めてしまう・・・

くウィングズ基地く

「・・・！」

カズヤの目がパチッと開く。カズヤは、体を起こした。

「ん？起きたのか？」

声を掛けてきたのは、クルード。そして、既に起きていたフィルミ

イ、昨日チームに加わったルナも、カズヤを見てくる。

「おはようございます、カズヤさん！」

「おはよう、カズヤ。」

ルナとフィルミイは、満面の笑みを浮かべながらそう言う。しかし、カズヤは少し気になった事が・・・

「フィルミイ、それは？」

気になったのは、フィルミイの脇に置いてある小さな鍋。ちなみに、鍋が置いてある所は、火が付いている。キャンプ場なんかで作る、火を付ける所を想像してもらうと分かると思う。ちなみに、フィルミイの一本だけ浮いている右前足には、お玉らしき物、つていうか、お玉が握られていた。

「カズヤが寝てたから、せっかくだし朝御飯でも作るうかと思って、お鍋にお玉、あと火を付ける道具も買って来ちゃった」

苦笑いしながら言うフィルミイ。

（へえ・・・ポケモン達の間でもそう言うのはあるんだな・・・）

と、思ってたたりするカズヤ。

「今はちよつと木の実を使ったスープを作ってるの。初めてだから美味しく出来てるか分からないけど・・・」

「大丈夫だよ。飯に失敗しちゃったとしても、そんなの誰にでもあ

る事だし。また次から上手くなればいいしね！」

不安そうに言うフィルミィに、そう言って笑い掛けるカズヤ。

「カズヤ・・・ありがとう・・・／＼／＼」

その様子を見て、クルードはいつもの事のように呆れ、ルナは不服そうな表情をした。

「ん・・・そろそろ出来たかな・・・」

フィルミィは、お玉でスープをすくって味見をする。

「・・・美味しい、かな・・・多分・・・」

味見してもなお、若干不安そうだが、フィルミィは木の器にスープを注ぎ、スプーンを入れて、皆に配る。

「じゃあ・・・」

「」「」「頂きます。」「」「」

カズヤは一口目を口に運ぶ。すると・・・

「・・・うん、美味しいよ。」

笑みを見せながらそう言う。

「おっ！上手いなこれ！」

「・・・まあまあね。」

と、各々の感想を述べる。ちなみに、ルナは美味しいと思っているのだが、素直になれない。

「ちょっと、うるさいわよ。」

「誰と喋ってんだ？」

「・・・何でも無いわ・・・」

そう言い、ルナは再びスープを飲み始める。

「良かった〜！」

フィルミイは、嬉しそうな声を挙げた。

「・・・そう言えばカズヤさん。」

「ん？」

「あれって何ですか？」

ルナが指差したのは、壁の突起にぶら下がっているペンダント。黒色の装飾が施されており、真ん中に緑色の宝石が埋め込まれている。宝石が何なのかは分からない。

「ああ、あれはちょっと拾ったやつだね・・・」

「未だに持ち主が見つかんねーんだよね・・・」

「ルナは知らない？『カイト』っていうジュプトルと、『フェアリー』っていうイーブイ。」

フィルミイがルナに聞くが、

「いえ、知らないわね。」

残念ながら、“知らない”という返答が帰ってきた。

「そつか。ならいいんだけど・・・」

「ところでカズヤ？」

「ん？」

「ロアの事は・・・どうするの？」

フィルミイが訊ねたのはロアの事。

「私・・・ロアがあんな事してるのには、訳があるんじゃないかって思うんだ・・・」

「うん・・・まあ、確かにね・・・」

と、考えてる時、

「俺は、ロアにはあんな事やめて欲しい。」

そう言ったのは、クルードだった。

「あのままじゃあ、シャロンもロアも可哀想だぜ？なんとか救ってやりてえよ・・・」

「・・・そうだね・・・判断は、またロアに会った時にする。ロアが戻って来れるのか・・・」

皆の間に沈黙が走る。どうしてロアが、あんな事をしているのかは分からない。だが、恐らくだが、一つ分かる事がある。恐らくロアは、“憎しみ”を活動源にしている。何となくだが、そんな気がしてならないのだ。

全員スープを飲み終わり、立ち上がる。

「取りあえずこの話は一旦終わり！ギルドの掲示板を見に行こう！」

「・・・それもそうだな。暗い事考えててもしょうがねえしな！」

「カズヤさん、掲示板って何の事ですか？」

ルナがカズヤに訊ねる。ルナは昨日探検隊になったばかりなのだ。

掲示板を見に行くと言われても、何の事やら、といった感じである。

「ああ、掲示板っていうのは・・・」

カズヤは、ルナに掲示板の事を簡単に説明した。

「へえ・・・なるほど。」

「じゃ、行こうか。」

という訳で、四匹でギルドへと向かう事になった……

「トレジャータウン」

「あ、君達、ちょっといいかな？」

カズヤ達は、カクレオン兄弟の道具屋の前で、とあるバリエードに呼び止められた。

「ん？何？」

カズヤが用件を聞く。

「君達つてもしかして……探検隊ウィングズ？」

「そうだけど？」

そのカズヤの言葉を聞くと、バリエードの表情が嬉しそうになっていく。

「君達がかあゝ！」

「えっと・・・何かご用ですか？」

フィルミイが訊ねると、

「僕はストレイ。ちょっとウィングズに頼みたい事があつたんだ。」

「俺達に頼みたい事？」

「君達は、探検家『グラデイス』を知っているかい？」

「『『グラデイス？』』」

全員の声が重なる。皆揃って知らないようだ。

「とても有名な探検家で、種族はハッサム。でもね、実はグラデイスは、かなり前から行方不明なんだ。」

「何それ？何かあつたの？」

少し興味が出てきたのか、ルナはそう訊ねてみる。

「彼が行方不明になったのは、『吹雪の島』ってところに探検に行つてからだ・・・」

「『吹雪の島』？うゝん・・・さつきから分からない単語ばかりだな・・・」

「吹雪の島っていうのは、ここから南西にある、氷界の島さ。僕がお願いしたいのは、グラデイスの搜索。グラデイスでも突破出来なかったかもしれないダンジョンだ。並の探検隊にはお願い出来ないでも、世界を救った君達なら大丈夫なんじゃないかって思ってるね。」

「なるほど・・・まあ依頼とあらば、そりゃあ受けるよ。」

「ありがとう！じゃあ宜しく頼むよ！僕はこの町に暫く滞在してるから。」

「分かった。」

そう言うのと、ストレイは去って行った・・・交差点の方に向かって行ったので、恐らくロンクのカフェにでも行ったのだろう。

「なあ、カズヤ。」

「ん？」

「どうやって海を渡るんだ？」

「あつ・・・」

暫く沈黙する四匹・・・

「・・・・・・考えて無かった！」

「考えてねえのかよ！！」

「こりゃやつちやったな。」

「やつちゃったなじゃねえよ！なんか『あつ・・・』とか言い始めた時からなんとなく考えて無いんじゃないかとかは思ったけども！何で本当に考えてねえんだよ！！」

「誰しも失敗の一つや二つはあるさ」ねっ、フィルミィ？」

「えっ？あ、うん。そうだね。」

まさかいきなり振られるとは思っていなかったフィルミィは、苦笑いでそう答える。

「カズヤさん！私も失敗の一つや二つぐらいあると思います！」

「だよね」

「・・・おいおい・・・」

そんな中、もうクルードは呆れるしか無かった・・・

〈海岸〉

「・・・海を見に来たら何か思い付かないかなあ・・・と思ったんだけど・・・」

カズヤ達は、海岸に来ていた。結局未だに海を渡る方法は見つからず、なんとなく海岸に来ている、という状況である。

「どうすんだよ・・・このままじゃ依頼が遂行出来ないぜ？」

「うーん・・・」

と、その時、

「何かお困りですか？」

「えっ？」

カズヤ達に、とあるポケモンが話しかけてきた。海の上から。

「あ！君は確か・・・ルイン！？」

そう、カズヤ達に話し掛けてきたのは、前にカズヤ達を幻の大地まで連れていつてくれたあのポケモン。ラプラスのルインだった。

「ちょうど良かった！ねえ、ちょっと乗せてって欲しい場所があるんだけど！」

カズヤは、ルインに事情を説明をする。

「なあフィルミイ、あのラプラス・・・ルインって誰だ？」

「私も知らないんだけど。」

当たり前だが、クルードとルナが知る訳が無い。

「えっと・・・前に幻の大地に連れていってくれたんだよ。」

フィルミイは、大まかに二匹に説明する。

一方、ルインの方も大方の事情は飲み込んでくれた。

「なるほど・・・海を渡る手段が無いので、僕に連れて行ってほしいと・・・」

「うん。」

「分かりました。吹雪の島ですよね。」

ルインは、優しい表情で了承してくれた。

「皆！いいってさ！」

「これで依頼を遂行出来るな。」

「うん！」

「やりましたね！カズヤさん！」

「では、準備が出来たら・・・」

「あ、準備なら出来てるよ。」

実はカズや達は、先程買い物やらなんやらの準備は、済ませてきた。いつでも準備OKだ。

「そうですか。では、乗ってください。」

その声を合図に、四匹はルインに乗り込む。

「じゃあ宜しく頼むよ!」

「はい。ちゃんと捕まっけて下さいね?」

そう言いながら、ウィングズを乗せたルインは、南西の『吹雪の島』へと泳ぎ始めた・・・

次回
氷界

第13話 探検家「グラデイス」(後書き)

夢の事や、ペンダントの事を覚えていない方は、第一部の21話と29話を見返すと分かります。

第14話 氷界（前書き）

今回はちょっと短いかも・・・

カズヤ

「死んでくれない？」

え・・・

第14話 氷界

「・・・くしゅん！」

冷たい氷界の中に鳴り響くくしゅみ。フィルミイのものだ。カズヤ達ウィングズは、『吹雪の島』へとやって来ていた。

「フィルミイ大丈夫？」

「へ、平気・・・くしゅん！」

カズヤに心配され、平気と言っているが、再び小さくくしゅみをしてしまうフィルミイ。全然大丈夫じゃ無さそうだ。

「・・・フィルミイ。」

「え？」

囁くように呼び掛けると、カズヤはフィルミイの横にぴったりとつく。

「なっ・・・！？」

その光景を見て唖然とするルナ。ちなみにクルードは、別段気にしてない。

「カ、カズヤ・・・／＼／＼」

「これで温かいでしょ？」

カズヤは炎タイプ。体温も他のポケモンに比べて高いのだ。くつつけば、そのポケモンも自ずと温かくなるだろう。

「うん・・・あったかいよ・・・ありがとう、カズヤ・・・」

カズヤに答えるように、フィルミイからも寄り添う。

「じ、しまった・・・」

つい咂然となつて、カズヤとフィルミイの様子を見ていたが、よくよく考えたらさつさと割り込めば良かった、と、ルナは後悔した。残念ながら、今のカズヤとフィルミイの間には、ルナでも入れそうに無い。心底悔しいが、今は諦める事にしたルナだった・・・

（・・・ルナも諦めわりいな・・・多分カズヤとフィルミイは天地が引っくり返つても離れねえぞ・・・）

そんな事を呆れた様子で思う、クルードだった・・・

「ん．．．？」

歩き続けていたカズヤ達の前に、あるポケモンが立ちはだかった。

「あれは．．．ポツチャマだな．．．」

そう。ポツチャマだ。しかし．．．

「．．．なんか．．．あんまり強そうじゃ無いね．．．」

ポツチャマには失礼かもしれないが、全然強そうに見えない。ポツチャマという種族が強そうに見えない訳じゃない。このポツチャマが強そうに見えないのだ。

「．．．えい。」

ルナは、適当にマジカルリーフをポツチャマに向けて飛ばしてみる。無論、ポツチャマは抵抗。あわを飛ばしてきたが、マジカルリーフに当たって全滅。そのままマジカルリーフはポツチャマに直撃し、ポツチャマはその場に倒れ込んで気絶してしまった。

「よわっ．．．」

ルナがドン引きしたような目でポツチャマを見る。

「．．．このポケモンって皆こうなのかなあ．．．？」

「いや．．．神秘の森でのレベル差はかなりあったからね．．．ここもそんな感じかもしれない．．．」

「あゝ、ありゃあ凄かったよな。」

うんうん、と頷きながら、クルードは共感する。

「ま、出てきたら倒すまでだよ。」

「さすがカズヤさん！格好いい・・・！」

目にハートマークを浮かべて、ルナはかなり高い声を出してそう言う。

（さっきまで冷たい目でポツチャマの事見てた奴とは思えねえぐらいの変わり様だな・・・）

ルナをジト目で見るクルードに、ルナはキッ！と睨み返す。それにより、クルードは慌てて目を逸らした。

「カズヤ、そろそろ行こ？」

「そうだね。」

未だに寄り添っているフィルミィが、上目遣いでカズヤに言う。それに対し、カズヤは微笑み返す。

（あ、あんの女アアア！！）

沸々と怒りが込み上げてくるルナであった・・・

未だ氷界を歩き続ける四匹。フィルミイはやはりカズヤにくつついている。カズヤもそれを嫌がる様子は無い。そんな中、ルナは・・・

(・・・それにしても、随分積もってるわね・・・雪・・・)

今彼らが歩いている辺りは、かなり雪が積もっている。他の所も中々だが、ここは特に凄い。腰辺りよりも上に来ている。まあ、彼らが歩く道に関しては、カズヤが炎で溶かしているので問題無いのだが。

(・・・)

・・・

『お姉ちゃん！雪がいっぱい積もってる！』

『フフ、そうね。』

はしゃぐ一匹のラルトスに、そのキルリアは微笑みながら答える。

『雪合戦しようよー！』

『雪合戦・・・ええ、いいわよ。』

そのキルリアは、笑顔を絶やさない。

『いくよー!』

ラルトスは、ねんりきで雪玉を作り、そのまま投げる。

『外れっ!』

そう言いながら、キルリアはかわす。そして、キルリアもラルトスと同じ方法で雪玉を投げる。ちなみに、もちろん手加減している。

『うわあ!』

しかし、ラルトスに当たる。

『やったな〜!お姉ちゃん!』

そして、ラルトスは再び雪玉を投げ始めた・・・

・・・

「・・・お姉ちゃん・・・」

「は?」

ボソツ、と呟くルナに、クルードが反応する。

「……！何でも無いわ……」

「……？」

（……昔の事、か……）

そう思いながら空を見上げるルナは、少し悲しげな目をしていた・

「うわあ……」

カズヤ達は、巨大な洞窟の入り口に来ていた。『クレバスの洞窟』だ。

「この先に何かあるのかも……」

「なら、さっさと行こうぜ！」

「いや、この辺は吹雪も無いみたいだし……一旦ここで休もう。」

張り切るクルードに、カズヤはそう言い切る。

「えゝ？俺はまだまだ行け」はっ・・・」

クルードは「まずい」とでも言いたげな表情になる。

「じゃあクルードだけ行きなよ。」

クルードは嫌な予感がしてなかったが、何故か答えてしまう。

「いや、やっぱり休む。」

「行つてらっしゃい。」

「いや、だから休むって・・・」

「行つてらっしゃい。」

「いや、あの・・・」

「行つてらっしゃい。」

「だから・・・」

「行つてらっしゃい。」

「・・・」

「行つてらっしゃい。」

「・・・泣くぞ?」

「どうぞどうぞ。」

「・・・(涙)」

この光景を、フィルミイは苦笑いで見ていた。ルナはと言うと・・・

(・・・やっぱり、思い出すな・・・故郷と、似てる・・・いや、雪しかあってないか・・・っていうかたまに降るくらいだったしね・・・)

そう思うと、自分で可笑しくなって、「クスッ」と笑うルナ。

「ル、ルナ?大丈夫?」

ルナの様子を見たフィルミイは心配するが、すぐにルナは元の様子に戻っていた。

(ルナ・・・?)

フィルミイは心配だったが、どうする事も出来なかった・・・

第14話 氷界 完

次回 グラデイスの行方

第14話 氷界（後書き）

はい伏線。

カズヤ

「D・A・M・A・R・E」

なんかその言い方怖い・・・

第15話 グラデイスの行方（前書き）

15話です。

カズヤ

「最近ペース落ち目だね。」

そればっか言っなよ・・・

カズヤ

「あゝ、はいはい。」

返事適当だな・・・

まあいいや。

では、第15話スタート。

第15話 グラデイスの行方

く????

「・・・様、ただいま戻りました。」

どこかの場所。岩場のような場所で、周りにはマグマが流れている。つまり、火山の中だ。

「・・・ラウスか・・・いい加減様付けはよせ。それと敬語もな・・・」

やって来たポケモン・・・ラウスに、その漆黒のポケモンは言う。

「いえ、今の俺の身分は・・・」

「気にするな。・・・昔からの友だろう?」

「・・・しかし・・・」

「私も、友に敬語を使われるのは可笑しな感じがする・・・だからやめてくれ・・・」

「・・・」

ラウスは暫く考える。ラウスは真面目な性格で、下に付いた以上は敬語は基本中の基本。だがしかし、この漆黒のポケモンが言った、

『友』というのは合っている。ラウスは、この漆黒のポケモンと友だった。いや、この漆黒のポケモンにとっては、今でも友なのだろう。真面目なラウスは、この関係が出来た時に友として振る舞うのをやめた。が……

「……………もう一度……友になつていいのか……？」

「……………何を言っているのだ……今でも、私とお前は友達……」

「そう……か……分かった……なら、そうさせてもらう。」

ラウスは、誰にも気付かれないぐらいの小さな笑みを浮かべるが、すぐに元の冷たい表情に戻る。

「それで？」

漆黒のポケモンは、ラウスに報告を促す。

「ああ……奴ら、吹雪の島に行ったそうだ……」

「吹雪の島、か……」

「どうする？」

漆黒のポケモンは暫く悩む様子を見せる。そして……

「今は一旦放っておく。」

「……………そうか……」

漆黒のポケモンの意図を一瞬で掴んだラウスは、そう呟いた・・・

くクレバスの洞窟く

「・・・外より寒いんだか寒くないんだか分かんないな・・・」

洞窟内は、風が遮断されるおかげで外よりは寒くない、という訳でも無く、床に張ってある氷が尋常じゃなく冷たい。

「こ、これは帰った頃に風邪引くかもな・・・」

水タイプだから寒さに強いクールドも、流石に寒いらしい。まあ元々こういう環境に住んでいれば話は変わってきただろうが。

「カズヤさーん！温めて・・・」

そう言いかけたルナの目に入ってきたのは、もう既にくつついてラブラブしているカズヤとフィルミィだった。

「カズヤ・・・あつたかい・・・」

「そう・・・？」

二匹ともかなり幸せそうな顔をしている。

「・・・」

ルナは、無表情で自分がぶら下げているバッグからおもむろに、オレンの実を取り出し・・・

「・・・！！！」

そのまま地面に投げて、叩き付けた。ベチャツ、という音と共に、オレンの実はぐちゃぐちゃに・・・

「何してんだ！？えっ！？ちよっ！！ほんと何してんの！？」

クルードがルナにあれこれ言うが、ルナは無視。そのままズンズンと前に向かって歩いて行った。

「・・・おいおい・・・」

やれやれ、といった感じになりながらも、クルードは三匹の後をついて行った・・・

「うっ……寒い寒い寒い寒い寒い!!」

「うるせーよ!!子供か!」

突然子供のように騒ぎ出すルナに、クルードがつっこむ。

「だって、寒いし……カズヤさんは暖めてくれないし……」

クルードは、カズヤのいる方向を見る。まあ様子はさっきと変わらない。相変わらずラブラブしている。

「……はあ……しょうがねえな……」

そう言うと、クルードは自分のバッグからある不思議玉を取り出す。

「……?何それ?」

頭に『?』マークを浮かべるルナ。クルードはニヤ、と笑い……

「まあ見てろって。」

そう言うと、クルードはその不思議玉を天（洞窟の中だが）に掲げる。すると……

「……!光が……!」

洞窟内には殆ど入らないはずの陽の光が、どこからかは分からない

が入ってきた。

「クルード！？何したの！？」

異変に気付いたカズヤが、クルードに訊ねる。

「日照り玉だ。ルナが『寒い寒い』ってうるさいからな。」

（うう・・・これじゃあカズヤと暑くてくっつけない・・・）

フィルミイは、少し残念そうな表情になる。

「フィルミイ」。もう充分すぎるくらいにくっ付いただろ？」

そんなフィルミイの心情を悟ってか、クルードが呆れたように言う。

「なっ！なんの・・・事？」

あたふたしながらフィルミイが言う。

「俺はもうお前らとは付き合いなげえんだ。そんぐらいは分かるつつの。」

「う、うう・・・／／／／」

フィルミイは恥ずかしそうに、顔を真っ赤にする。

「クルード、フィルミイ苛めるとぶっ飛ばすよ（殺すよ）？」

「頼むからその冷たい声で物騒な事言うのをやめてくれ。あと『飛ば

すよ』の部分が『殺すよ』に聞こえるのは気のせいか?」(滝汗)

「気のせいだよ」

「・・・」

シヤレになんねえからもうフィルミィをからかうのはやめておこう、
と思ったクルードであった。

「まっ、これであつたかくなつただろ。さっさと行こうぜ、ルナ。」

「あ・・・え、ええ。」

一瞬唖然としたルナだったが、すぐに元に戻つた。

「しかし・・・さっきから全然敵が出ないんだけど・・・」

カズヤが怪奇そうな表情になる。そう、全然先程から敵が出ないのだ。

「まあでも楽だよな。」

「だな。敵がいなに超した事はねえな。」

「・・・でも、なんで・・・?不思議のダンジョンって敵が出るものなんじゃ・・・」

フィルミィとクルードは特に気にしてない中、ルナは気にしている。
敵が出ない理由を。

「うーん・・・まあここで考えても答えは出ないよ。さつさと先に進もう。」

「そうですか・・・カズヤさんがそう言うなら・・・」

という訳で、ルナも一応納得しておく事にした。

〈中間地点〉

「・・・ん・・・？」

「おいおい、珍しいな。先客がいるぞ？」

中間地点までやって来た彼らの目に入ってきたのは、なんと誰かが休んでいる光景だった。バッグを持っている辺り、ここに住んでいるポケモンじゃ無さそうだ。そもそも、その事はそのポケモンの種族が物語っていた。『サンダース』なのだ。こんな所に野生のサンダースなど居はしない。

「・・・！」

皆（ルナを除く）が挨拶でもしようかと考えていたその時、フィルミイがそのサンダースに向かって走り出した。

「は？」

「え！？ちよつ！フィルミイ！？」

その行動に驚きつつも、カズヤはフィルミイを引き止めようとしたが、フィルミイは止まらない。

「ん・・・？」

休んでいたサンダースも、フィルミイに気が付き、目を見開く。

「・・・ふう・・・」

サンダースの前に辿り着いたフィルミイは、軽く息を落ち着かせる。そして・・・

「どうして・・・こんな所に？」

そう訊ねた。

「え？」

「何だ？知り合いなのか？」

「ま、どうでもいいけど。」

ルナは心底どうでも良さそうだ。

「お前・・・フィルミイか！？久々だなー！！」

そう言つて、そのサンダースはアツハツハ！と少々オーバーに笑う。人間なら腹を抱えていそうだ。カズヤ達は、サンダースに近付いてみた。

「あの・・・」

「ん？何だ？お前ら。」

初対面のポケモンに礼儀もクソも無い、といった感じで、そのサンダースは訊ねてきた。

「僕達は探検隊ウイングズだけど・・・」

「え？・・・ああ！！あんたらがフィルミイの所属しているウイングズか！」

そう言つと、そのサンダースはまた笑い始める。

「え、えーつと・・・フィルミイとはどんな関係なんだ？」

クルードがテンションについていけなさそうになりながらも、サンダースに訊ねた。

「カズヤ、クルード、ルナ、このサンダースね、私のお兄ちゃんなんだ。」

「え？」

「は？」

「・・・え？」

カズヤ、クルード、そして、流石にルナも意外そうな声を出す。

「フィ、フィルミィのお兄さん！？」

「マジか！？」

「全然似てないわよ！？」（性格が）

「あゝ、よく言われる。」

ルナの言葉に、苦笑いでそのサンダースは答える。

「へえ・・・そつか。フィルミィにはお兄さんがいたんだね。」

「うん。」

「俺はフォーレン。宜しくな！」

「僕はカズヤ。」

「俺はクルードだ。」

「・・・ルナよ。」

各々自己紹介し、話題はなぜフォーレンがここにいるかに。

「ねえ、お兄ちゃんは何でここにいるの？」

「ああ、実はな・・・この辺で悪さをしてるユキメノコの話、知ってるか？」

そのフォーレンの言葉に、全員が『？』マークを浮かべる。

「あ、やっぱり知らない？結構知られてないんだよこれ！アッハッハッハ！！」

と、無駄に笑うフォーレン。今の話で面白いところなど、どこにあったのだろうか・・・

「ふう・・・まあそれでな、そのユキメノコ、『スウィン』って名前なんだけど・・・もしかしたら・・・」

「『『『もしかしたら？』』』」

「・・・俺が昔振った奴かも！」

声を張り上げるフォーレン。

「・・・え？」

「お兄ちゃん・・・どういう事？」

「いやあ、何年か前にさあ、俺に告白してきた奴がいてな。でもまあ・・・殆ど話した事も無かったし、振ったんだ。で、今になってこの吹雪の島のクレバスの洞窟で悪さしてる、っていう噂を聞いて

な。よく考えたら、振った時帰り際に・・・『世界滅べ』とか言ってたな、みたいな。実際ここに来て行方不明になってる奴も何匹かいるみたいだし。」

「・・・つまり・・・アレ？責任感じてここに来て、スウインを止める、って事・・・？」

「そういう事だ」

パチンっ！とウイंकをするフォーレン。

「それ・・・」

「「「お前のせいだろう（^{アンタ}）でしょう（^{アンタ}）がああああ！……！」」

「え？」

怒ったカズヤ、クルード、ルナは、かえんほうしゃ、れいとうビーム、マジカルリーフを同時にフォーレンに発動した。

「あゝあ。」

フィルミイはやれやれ、といった感じである。

「えっ！ちよっ！……ぐわあああああ！……！……！」

フォーレンは、三つの攻撃をまともにくらった・・・

「まあこれで、グラデイスの行方はおおよそ分かったね。」

「そのスウィンって奴に捕まってる可能性が高いな。」

「つまり・・・」

「このクレバスの洞窟の奥！」

と、カズヤ、クルード、フィルミィ、ルナの順に言う。え？フォーレン？倒れてる。

「よし、それじゃあ早速・・・」

「待てえ！！」

倒れていたフォーレンは、バツ！と立ち上がった。復活が早い奴である。

「ん？何？」

「一つ聞きたいんだが・・・お前はフィルミィとどついう関係だ？」

それは、カズヤに向けての質問。フォーレンは急に真剣な感じになっている。

「まずっ…！」

「^{バートナー}恋人だけど？」

この言葉に、フォーレンは暫く黙り、フィルミイは、「あちゃー・・
・」となんか落ち込んでいる。そして、暫く黙っていたフォーレン
が、口を開いた。

「こ、こ、こい、こい、こいび・・恋人だとおおおおお！
！！！！！！！！？」

フォーレンの背後が炎で燃え上がっている・・・ような気がする。
この様子を見たクルードとルナは、一瞬で「あ、めんどくさいタイ
プの奴だ。」と判断した。

「うわっ！ちよっ！何！？何をそんなに怒ってんの！？」

ぶつちやけ、カズヤには訳が分からない。そんなカズヤに、フィル
ミイが説明する。

「あの・・・カズヤ・・・お兄ちゃんね・・・いわゆる・・・『シ
スコン』・・・なの・・・」

「・・・だから、あんな怒ってんのか・・・」

カズヤは、面倒な事になってしまった、と溜め息をついた。

「ふざけるなああああ！！！！フィルミイの恋人だとなど！！勝手に
言っつなああああああ！！！！！」

「お兄ちゃん！！別に勝手にじゃないよ！私は・・・カズヤの事が好きなの！」

「んなつ！！・・・まさか、もう既にあんな事やこんな事やそんな事を！？」

「え・・・？」

意味が分からずフィルミイは困惑する。ちなみに、意味は読者の皆様のご想像にお任せします。

「お前の言うあんな事やこんな事やそんな事がなんなのかは知らねえが、カズヤとフィルミイはもうキスもしてるぜ？」

「ちょっ！クルード・・・！」

（キ、キス！？）

密かにショックを受けるルナ。

「キス・・・だと・・・！？」

クルードの言葉を聞き、暫く何かを考えるフォーレン。そして・・・

「・・・くっ・・・フィルミイが認めてる上、キスまでしたのか・・・
だったら・・・俺と戦え！カズヤ！」

「え？」

「俺と戦って勝ったら！貴様がフィルミイの恋人だと認めてやる！」

「はあ！？」

ここに、世界一面倒臭い勝負の火蓋が切って落とされるのだった。
・
・

第15話 グラデイスの行方 完

次回 シスコンとの対決

第15話 グラデイスの行方（後書き）

という訳で新キャラです。

フォーレン

「フィルミイの兄のフォーレンだ！宜しくな！」

では、下にキャラ紹介を。

名前	フォーレン
種族	サンダース
性別	♂
年齢	18
性格	陽気、適当
所属	無し
一人称	俺

フィルミイの兄。かなり陽気な性格・・・というか、適当な性格でよく「アッハッハ！」と笑う。危険なぐらい極度のシスコンで、フィルミイ好きである。カズヤがフィルミイの恋人だと知った途端、血相変えてカズヤにとって掛かる程。フィルミイもそれに関してはかなり困っている。バトルの実力は・・・次回明らかになる。

といった感じですね。

フォーレン

「俺はシスコンだ！なんか悪いか！！」

いや、別に誰もそんな事言っていないけど・・・

まあ、次回もお楽しみに。

ちなみに、カズヤ達に聞かせる程の事でも無かったので、ここに書きますが、敵がいなかったのは彼が倒してたからです。

第16話 シスコンとの対決（前書き）

いや、お待たせしました。（あれ？でも待っていてくれる人いるのかな？）

では、十六話、どうぞ！

第16話 シスコンとの対決

前回、フィルミイの兄、フォーレンに、自分はフィルミイの恋人だ、
と言ってしまったカズヤ。しかしそれは、シスコンのフォーレンの
怒りを買ってしまう。それが原因となり、カズヤはフォーレンと勝
負する事になってしまった・・・

クレバスの洞窟中間地点、そこに彼らはいた。カズヤとフォーレン
は対峙した状態、そして、フィルミイ達は端の方で様子を見ている。

（なんでこんな面倒臭い事に・・・）

カズヤは、心底面倒臭そうな表情で溜め息をつく。

「おい！溜め息すんな！殺る気あんのか！？」

フォーレンは血相変えた表情で、カズヤを怒鳴り付ける。

「・・・っていうか俺達依頼の途中じゃなかったっけ・・・」

「そうね・・・」

「お兄ちゃん・・・」

他三匹も、次々と溜め息を溢す。

「さうて、早速始めるとするか・・・」

そう言うのと、フォーレンはその辺に落ちていた石を拾う。

「いいか？今からこれを投げる。それが地面に落ちたと同時に始めるぞ。」

「・・・分かったよ・・・」

「じゃあ・・・行くぞ・・・！」

そう言い、フォーレンは前足で器用に石を空高く（洞窟の中だが）放り投げた。

「」「」「」・・・「」「」「」

ほんの少し、石が落ちてくるまでの間、静寂が続いた。そして・・・

「・・・！」

石が音を立てて落ちた。それと同時に、フォーレンがカズヤに向かって走り出す。

「・・・！」

カズヤは、フォーレンの思っていた以上のスピードに一瞬、驚きを見せる。

「くらえっ!!」

でんこうせっか。フォーレンは、その圧倒的なスピードで、カズヤに体当たりしていく。が、そう簡単に当たるカズヤでも無い。カズヤは体を捻らせてでんこうせっかをかわし、いわくだきの蹴りを放つ。が・・・

「なっ!?!」

予想外の事が起きた。蹴りが入る寸前に、フォーレンの姿が消えたのだ。

「こっちだ!」

その、フォーレンの声は、カズヤの真後ろから聞こえた。カズヤは危険を察知し、フォーレンのいる反対側の方向に飛び退く。すると、先程までカズヤがいた場所に、雷が落ちた。

「っと・・・やるな・・・初見で今の技をかわすとはな・・・」

少し苦い表情になるフォーレン。

「なんだ・・・?今の技・・・」

初めて見る現象に、怪訝そうな表情になるカズヤ。

「カズヤ!お兄ちゃんは、『しんそく』が使えるの!」

悩んでいるカズヤに、遠くからフィルミイが答える。

「フィルミイ！何で教えちゃうんだよー！」

技の正体をあつさり教えてしまったフィルミイに、フォーレンが涙目になりながら訊ねる。

「そりゃあ、カズヤに勝ってほしいし・・・」

「が〜ん・・・」

フォーレンは、フィルミイの答えを聞いて、物凄く落ち込む。

（やる気あるのかコイツ・・・）

そんな様子を見て、カズヤは呆れた。

「なあフィルミイ、サンダースってしんそくなんか覚えるのか？」

「いや、まあ普通は覚えられないんだけどね・・・」

と、クルードの疑問に答えようとした時、フォーレンが割り込んできた。

「ハッハッハ！！それは俺が教えてやるっ！」

「無駄にテンション高くてイライラするからやめてくんない？」

ルナは、ストレートにフォーレンに言う。

「うう・・・どうせ俺なんか・・・」

「あ、いじけた・・・」

（（・・・めんどくさっ！））

カズヤ、クルード、ルナの心が一つになった瞬間であった。

「・・・まあいいや・・・俺のしんそくはなあ、俺とフィルミイの故郷にいる、『しんそくじいさん』に習って手に入れた技なんだ！ちなみにしんそくじいさんの種族はルカリオだ！」

「しんそくじいさん？」

カズヤが聞き返し、フォーレンは説明を続ける。

「しんそくじいさんに教われれば、通常は覚えられない種族でも素質があれば覚えられるんだぜ！つまり、俺には素質があったって事だ！！俺すげーだろ！！」

「あゝ凄い凄い。」（棒読み）

「うわっ・・・棒読みは無いだろ、お前・・・落ち込むぞ、俺・・・」

「勝手に落ち込んでろっ！！」

そう言いながら、カズヤはかえんほうしゃをフォーレンに向けて放った。

「おっと！」

フォーレンは、余裕でそれをかわす。まあそれはカズヤも予想している。

「これでもくらっとけ！」

そう言うと、フォーレンは強烈な電撃、『10万ボルト』を放った。

「はあっ！」

カズヤは、かけぶんしんを発動。10万ボルトは分身に当たり、そのまま分身達は大きくフォーレンを取り囲む。

「これで・・・どうだ！」

カズヤは、全方位からかえんほうしゃを放つ。と言っても、その中で本物なかえんほうしゃは一つだけなのだが。

「おいおい！冗談キツイっつーの！」

そう言いながら、フォーレンはしんそくで全てのかえんほうしゃをかわした。

「んなっ!？」

流石に全てかわされるとは思っていなかったカズヤ。分身は消え、カズヤは驚愕の表情になるが、その一瞬の隙が命取りに。

「・・・はっ・・・!!」

気がついたら、フォーレンはすぐ目の前で、攻撃を始めようとしていた。

「カズヤ!!」

「カズヤさん!!」

フィルミィとルナが叫び、クルードはじつと様子を見守る。

「っ!!」

フォーレンの後ろ足での蹴りを、何とか防いだカズヤ。しかし・・・

「なっ・・・!!」

もう片方の足での二発目が飛んできた。それは直撃し、カズヤを吹き飛ばす。

「ぐっ・・・!!」

カズヤは、なんとか受け身をとって、体制を立て直した。

「おいおい、一発目を防いだからって安心すんなよ?」

ニヤニヤしながらフォーレンは、カズヤに忠告した。

「・・・にどげりか・・・」

「そうぞ、まあ二度蹴るんだから当たり前なんだけどな。」

そう言うと、フォーレンは再び姿を消した。

（またしんそく！）

カズヤは、勘で後ろから攻撃が来ると判断し、横に飛び退いた。

「残念！」

しかし、勘など中々当たるものではない。カズヤが飛び退いた方向から、フォーレンが電気を体に纏って走ってきた。

「ワイルドボルト！！！」

そう叫びながら、フォーレンはカズヤに突進した。

「させるかあ！！！」

カズヤは、ドラゴンクローを発動し、それによってワイルドボルトを発動中のフォーレンを、自分の右後ろに受け流した。

「ちっ！」

「はあああっ！！！」

カズヤはかえんほうしゃをフォーレンに向けて放つ、が、またしてもフォーレンは姿を消した。しかも・・・

「っ！！なんだ！？この光！」

眩しくて目が開けられないぐらいの光が、辺り一帯を包む。

「くらいやがれっ!!」

その声が聞こえたと同時に、カズヤの背中になかにぶつかられたような衝撃が走る。そして、カズヤはそのまま吹っ飛ばされてしまった。

「つたたたた・・・」

カズヤが起き上がると、光は消えており、今はフォーレンの姿が確認出来る。

「おいおい、手も足も出ないのか？」

(・・・しんそくが厄介だな・・・あれに対抗出来れば・・・でも、あれに対抗するには同じスピードになるぐらいしか・・・ん？待てよ・・・さつきアイツ、しんそくは教えてもらったって・・・しかも、通常覚えられない種族でも覚えられるしんそく・・・つまりアイツが使ってるのは、そのしんそくだよな・・・やってみるか・・・)

「来ないのか？ならこっちから行くぜ！」

再びフォーレンの姿が消え、カズヤにしんそくの体当たりで攻撃を仕掛ける。カズヤは、なるべくそれらをかわしつつ、フォーレンのしんそくを見続けた。ひたすら、ひたすら・・・

「カズヤさん・・・何をしてるんだろう・・・」

「きつと何か策があるんだよ。」

「だな。」

攻撃を仕掛けないカズヤに、少々不安になるルナだが、フィルミィとクルードはカズヤが何かの為にああしてるのだと信じている。

「・・・分かった!!」

カズヤは、突然そう叫んだ。

(・・・？何が分かったんだ・・・？まあいい、これで決めてやる!!)

フォーレンは少しカズヤの言動に疑問を持ちつつも、カズヤにとどめを刺そうとしんそくの体当たりを仕掛けた。が・・・そこで彼にとって信じられない事が起きた・・・カズヤが消えた・・・いや、自分と同じスピードで動き始めたのだ。

「なっ!?!」

「カズヤが・・・凄いスピードになってるよ!!」

「ありゃはええな・・・」

「凄い・・・」

フォーレンやフィルミィ達は、カズヤの急激なスピードの変化に驚く。

「沢山見せて貰ったよ・・・君のしんそく!」

「なに・・・?」

「君のしんそくは、素質さえあれば誰でも覚えられるしんそく・・・僕にもし、素質があつたら君のしんそくを観察してれば出来るようになるかな?って思ったんだけど・・・どうやら当たりだったみたい。」

「な、なんつー奴だ・・・」

「さあ、これでスピードは互角だ!」

「くっそ!」

フォーレンは、アイアンテールをカズヤに仕掛ける。

「甘いよ!」

それにカズヤはドラゴンクロードで対抗し、力押しでフォーレンを押し飛ばす。

「ぐあっ!」

「逃がさない!」

しんそくでフォーレンの後ろに回り込み、いわくダキで蹴り飛ばした。

「ガハツ・・・！！」

「これで終わりだ！！」

カズヤは、最大威力でかえんほうしゃを放つ。フォーレンはかわす暇も無く、その膨大な炎に包まれた・・・

「うぐぐっ・・・」

「ん？あ、起きた。」

「・・・その声は・・・」

フォーレンは、目を覚ました。どうやらあの後、気絶したようだ。場所は先程と変わっていない。フォーレンは、少し痛んだ体を起こした。

「・・・俺は・・・負けたのか・・・」

「そうだね、僕の勝ちだよ。」

「これで、私とカズヤが恋人同士なの認めてくれるよね？」

「・・・しょうがねえ・・・約束したしな・・・」

俯きながら、フォーレンはそう言う。

「・・・スウインの事はお前達に任せるよ・・・俺はこんな怪我だし、一旦帰るわ。」

「そうか・・・ま、気を付けて帰れよ。」

「さっさといなくなつて。」

「・・・酷いな・・・」

落ち込むフォーレン。人間だったら体育座りしてそうだ。

「ま、いいや・・・カズヤ！ちゃんとフィルミイの事幸せにしてやらねーと！あの、アレだからな！酷いからな！」

「言われなくてもね！」

「じゃあな〜！」

そう言い、フォーレンは外へと引き返して行つた・・・

「・・・さて、僕達も行くつか。」

「うん！」

「ああ。」

「はい！」

こうして、フォーレンとの勝負に勝利したカズヤ。彼らは更に奥に行き、グラデイスの救出を目指すのだった・・・

第16話 シスコンとの対決 完

次回 氷の牢

第16話 シスコンとの対決（後書き）

今回は中々疲れた・・・

第17話 氷の牢（前書き）

やっと更新しました。（汗）

カズヤ

「（汗）じゃねーよ！いくらなんでも遅すぎだよ！」

すみません・・・

第17話 氷の牢

「・・・ここが一番奥かな・・・」

確認するように、カズヤが呟く。辺りを見回してみると、行き止まり。やはり一番奥のようだ。

「・・・最深部は余計に寒いな・・・」

「水タイプなんだからこれぐらい耐えなさいよ・・・」

そう言うルナも、やはり寒いのか小刻みに震えている。

「うう・・・凍っちゃいそう・・・」

「（ほんとに凍っちゃえばいいのに・・・）」

寒そうに呟くフィルミィに対し、物騒な事を考えるルナだが、無論他の皆に聞こえる筈も無く、スルーされる。

「・・・ん・・・？」

少し歩みを進めると、とある物が確認出来た。どうやら、巨大な氷のようだ・・・

「・・・！カズヤ・・・あれ・・・！！」

そう言うフィルミィの顔は、真っ青になっている。寒さで、という

訳では無さそうだ。

「んな・・・!!」

「何・・・あれ・・・」

クルードとルナも、つられて顔が真っ青になる。

「・・・!! ポケモンが・・・! 氷の中に・・・!!」

カズヤ達の目の先にあつたのは、ポケモンが入っている巨大な氷だった・・・

「あれは・・・ハッサム・・・?」

「確か、グラデイスの種族はハッサムだったよね・・・って事は・・・もしかなくてもあのポケモンがグラデイス・・・?」

カズヤが冷や汗を流す。グラデイスが行方不明になったのは、最近の事では無く、結構前の事。もしもそんなにも前から凍っていたんだとしたら・・・死・・・

「おわああああ!!!!」

重い沈黙に耐えられず、クルードが叫び声を挙げる。

「ど、どうしょ! どうしょ! ? い、生きてるよね! ? ねえ! ?」

「わ、私に聞かないでよ!! カ、カズヤさん! どうなんですか! ?」

「ええっ！？知らないよそんな事！」

カズヤ達は、次々と焦り始める。その時・・・

「フフフ・・・ちゃんと生きてるわよ・・・？」

「」「」「！」「」「」

突然聞こえた声に、全員が静かになる。

「なんだ・・・？」

カズヤ達は辺りの様子を伺ってみるが、誰もいない。そう思った矢先、辺りを吹雪が覆った。

「おわっ！」

「きゃっ！」

「これは・・・！」

吹雪が止み、とあるポケモンが姿を現した・・・

「フフフ・・・ようこそ、氷界の洞窟へ・・・」

「・・・！」

その雪女を象ったような姿、それは、間違いなく『ユキメノコ』だった。

「なっ!?!」

スウィンから、大量の猛吹雪が発せられる。

「皆!私のお後ろに!」

フィルミィに言われ、カズヤ、クルード、ルナはフィルミィのお後ろに集まる。

「まもる!?!」

フィルミィが右前足を正面に突き出すと、そこに緑色のバリアが張られる。

「おいおいおい!?!なに挑発してんだよお前は!?!」

フィルミィのまもるに守られながら、クルードがルナに怒鳴る。

「いや、つい……」

「ついい!?!」

「……はあ……」

二匹のやり取りを見たカズヤは、思わず溜め息を吐いた。

「それにしても……よっぽどフォーレンに振られたの、シヨックだったんだなあ……」

カズヤは、何となくくだらないような気がして、頭を掻く。そして

そんなカズヤに、吹雪が終わりまもるを解除したフィルミイが言う。

「カズヤ、女の子が振られたら、凄くショックを受けるものだよ。」

「ん、そうか・・・」

フィルミイに論され、取りあえずカズヤは納得しておく事にした。

「さて・・・どうするか・・・」

と、考える時間など、スウィンはくれなかった。

「はああああっ!!」

カズヤにスウィンからのれいとうビームが飛んでくる。まあ大して効く訳でも無いが、一応カズヤはかわしておく事にした。

「よっと・・・」

横に飛び退いた後、カズヤはスウィンを見て・・・

「ねえ、そんなにフォーレンが好きだったの？」

そう訊ねた。

「好きだったわよ！昔はね！！今は大っ嫌い！！！！」

そう叫びながら飛ばしてくるれいとうビームをひいひいとかわしながら、カズヤは続ける。そして、その様子を他三匹は、ただ見ている。

「そりゃフォーレンは君を振ったかもしれないけどさ．．．」

「そうよ！アイツは私の事を振った！！勇気を出して告白したのに．．．！アイツは．．．！！」

．．．．．

『あ．．．あのっ！！』

『ん．．．？』

ふらふらと散歩していたフォーレンに声を掛けたのは、一匹のユキメノコ．．．スウィンだ。

『君は．．．？』

『あの．．．その．．．えっと．．．』

『（なんだか変な子だな．．．）』

『よ、良かったら．．．．．わたしと．．．．．っ、っ、っ
き、っ．．．付き合ってください！！』

『．．．．．え．．．？』

突然の見知らぬ子からの告白に、驚きを見せるフォーレン。しかし、今までまったく話した事も無いポケモン。少しフォーレンも戸惑うが、やはり・・・

『・・・いや、ごめん、無理だ。』

という事になってしまふ。

『え・・・・・・』

・・・

「あんなあつさり！？あんなのおかしいわよ！！私は・・・！本気で好きだったのに・・・！」

「（・・・まあ・・・確かにあつさりし過ぎなような気がするけど・・・いきなり告白するスウィンもな・・・）」

腕を組んで考えるカズヤ。

「・・・あのさあ・・・」

「何よ！！！」

「『友達から』とか無かったの？」

「・・・・・・・・!!」

「（なんか『その手があったか!』みたいな顔してる!!）」

と、心の中でだがフィルミイは突っ込む。

「なんか『その手があったか!』みたいな表情してるわね。」

「アホだなアイツ・・・」

クルードとルナには、『心の中で』とかは無かった・・・

「う、うるさい!言っとくけど、別に『その手があった!』とか思
ってないわよ!!」

「こいつツンデレか!?」

「そこっ!うるさい!私はツンデレじゃない!!」

クルードに、顔を赤くして怒鳴るスウィン。

「もう一度フォーレンに会ってきなよ、『友達から』とか言えば大
丈夫だと思うよ?」

「会える訳・・・!」

「て言うか、フォーレンが君の告白を断った理由って、あんまり話
した事無いからだよ?」

「・・・え?」

理由を聞き、スウィンは固まる。

「（もしかして、理由を知らなかったのかなあ？）」

と、密かにフィルミイは首を傾げる。

「つまり、たくさん話せば、いや、それもアレか・・・友達からや
っていけば、脈ありかもね。」

「・・・っ！そうだとっても・・・！」

スウィンは、頑なにフォーレンに会いたがらない。

「ねえ、どうしてお兄ちゃんの事が好きだったの？」

なかなかフォーレンと会おうとしないスウィンに痺れを切らし、フ
イルミイはフォーレンが好きだった理由を訊いてみる。

「お兄ちゃん・・・？あなた、もしかして・・・フォーレンの妹・・・？」

「うん。」

「・・・そう・・・そうだったの・・・」

なんだか勝手に何か納得しているスウィン。

「・・・？」

「いえ、何でも無いの・・・」

皆がよく分からず首を傾げるが、構わずスウィンは続ける。

「・・・フォーレンは・・・昔、まだ私がユキワラシだった頃に、助けてくれたの・・・」

「・・・どういう事？」

「小さい頃の私は、冬に凍った池の上で、滑って遊ぶのが好きだったんだ・・・」

フォーレンやフィルミイの故郷、つまり、スウィンの故郷は、冬になると池が凍る。そんなに分厚くは無いが、ユキワラシぐらいなら楽に乗れるのだ。

「ただね・・・ある日、私が凍った池に遊びに行った時・・・その時は、ユキワラシだった私でも乗れないぐらいに氷が薄かったの・・・」

「まさか・・・！」

カズヤが声を挙げ、他三匹もどうなったのか、何となく分かっしまった。

「子供だった私には、それが分からなくて・・・いつものように氷の上に乗ったら・・・」

「氷が割れて、落ちたんだな？」

スウィンが言うよりも先に、クルードが確信を持ってそう言った。

「そう……池の冷たさは、私は氷タイプだから大丈夫だったけど……私は、泳げなかったんだ……」

要するに、溺れたのだ。

「でもね、そんな時、まだイーブイだったフォーレンが、溺れてる私の事を見つけて、迷わずに飛び込んできて、私の事を助けてくれたの……」

「……何でフォーレンだって事を知ってるの？」

疑問に思い、カズヤはスウィンに訊ねてみる。確かに、その時点では会った事は無いんだから、フォーレンの事を知る訳が無い。

「あ、そうね……正確に言うと、助けられた後に名前を訊いて知ったんだけどね……」

「ふん。」

なんかルナは大して興味無さそうである。

「それなのに……あの時、助けてくれたのに！あの後、もう一度彼を見つけて！勇気を出して告白したのに！私の事憶えてもいないなんて！！私は彼が進化して種族が変わっても憶えてたのに……！」

急に怒りが沸いてきたのか、声が大きくなるスウィン。

「（・・・その時の話をしないでいきなり告白するのもどうかと思うけど・・・まあいいや。）フォーレンにとっては、目の前の誰かが困ってたり、危険な状況だったりしたら助けるのが当然、って事じゃないの？」

「え・・・？」

カズヤの言葉に目を見開くスウィン。

「当然の事をいちいち憶えないでしょ。」

「・・・助けるのが・・・当然の事・・・！」

スウィンは、暫く何かを考える様子を見せる。そして・・・

「・・・私、フォーレンにもう一度会ってくる！色々ありがとう
！」

そう言い、姿を消した・・・

「消えた・・・！？」

「まあゴーストタイプだからあんぐらいは出来るだろうな。」

啞然とするルナに、クルードが説明する。

「大丈夫かな・・・？」

「・・・大丈夫だよ、最初とは目が違ったし。きつともう、悪さもしないよ・・・。」

心配そうにするフィルミィに、安心するように促すカズヤ。

「さて！帰るか！」

と、クルードが張り切って言う。が・・・

「いや、まだ帰らないよ・・・」

溜め息を吐きながら、カズヤがクルードを止めた。

「ん？」

「まだグラデイスさんを助けて無いでしょーが。僕達の今回の目的は、グラデイスさんの探索、及び救出だよ？忘れた？」

「あ・・・」

どうやら、完全に忘れていたようである。そんなクルードに、ルナは溜め息、フィルミィは苦笑である。

「えっと、氷を溶かせばいいのか・・・」

カズヤは、グラデイスが閉じ込められてる氷に向かって、弱めにかえんほうしゃを放つ。

「あ！溶けた！」

かえんほうしゃにより、見事に氷は溶け、グラデイスが解放された。

「・・・うぐぐ・・・ここは・・・」

「あれ？もう起きた。」

解放されたとは言え、今まで氷の中に閉じ込められていたグラデイス。暫くは眠ったままかと思ったのだが、すぐにグラデイスは目を覚ました。

「・・・お主等は・・・？」

「「「（思ってたのと口調違う！！）」「」」」

今、ウィングズの心が一つとなった瞬間だった。

「えつと・・・」

ウィングズは、グラデイスに今までの事情を説明する。

「・・・成程・・・そんな事になっていようとはな・・・ならば早く戻らなくては。」

「そうだね、という訳で、脱出！」

そう言うと、カズヤは探検隊バッジを掲げる。カズヤ達は黄色い光に飲まれ、光が消えた後には何もいなかった・・・

「やゝ、まさか本当に助けちゃうなんて、凄いね君達！やっぱり世界を救った英雄の名は伊達じゃ無いなゝ！」

「ははは・・・」

ここはトレジャータウンの交差点。その後、再びラプラスのルインの背中に乗り、帰ってきたカズヤ達。依頼主のバリヤードのストレイに結果報告をしているところだった。ちなみに、グラデイスも一緒にいるが、暫く見ない内に大分変わった景色に興味深々なようだ。

「じゃあこれが報酬ね！」

そう言つて、ストレイがカズヤに渡したのは・・・

「・・・何だこれ？」

四つの『何か』だった。銀色で、紫色の宝石が埋め込まれた腕輪、光を当てる位置により、水色、黄色、赤色、ピンク色、黒色、黄緑色、青色に色を変えるマフラー、鮮やかな水色のスカーフ、ピンク色のリボンのようだ。

「じゃあ順番に説明して行くね。まず、その腕輪、それは『フレイムバングル』っていう装備だね。リザードン専用の物なんだけど、君はヒトカゲだから君も効果を得られる。」

「へえ・・・それで、その効果、つてのは？」

「着けると、水タイプの攻撃を受けた時にそのダメージを体力に変えちゃうんだ。」

「……！」「」

全員がその予想以上の効力に驚く。それもそうだ。本来炎タイプが弱点とする、水タイプの攻撃を体力に変えてしまうのだから。という訳で、カズヤはフレームバングルを右手首に装着する。

「じゃあ……このマフラーは？」

「これは『七色マフラー』さ。イーブイの専用装備で、着けると天候でのダメージを受けなくなるんだ。」

「地味に便利だな……」

「はい、フィルミィ。」

「うん、ありがと。／＼／＼」

カズヤは、フィルミィの首に、七色マフラーを巻いてあげた。

「じゃあこのスカーフは……？」

「それは『怒りのスカーフ』。アリゲイツの専用装備さ。」

「俺か。」

そう言って、カズヤから怒りのスカーフを受け取るクルード。

「これの効果は、直接攻撃をしてきた相手にその、0・25倍のダメージを与えられるんだ。」

「おおっ！強いなそれ！」

早速、と言わんばかりに、クルードはスカーフを首に巻いた。

「そして、このリボンは、『マジカルリボン』だ。キルリアの専用装備なんだ。」

「はい、ルナ。」

カズヤは、ルナにリボンを手渡し、ルナはそれを首の下辺りに着けた。

「それを装備すると、エスパータイプの技が悪タイプに普通に効くようになるよ。」

「そ、それは便利ね・・・！」

いくらルナでも、この時は嬉しそうだ。

「どうかな？報酬はこれで。」

「申し分無いよ！むしろこんなに貰ってもいいの？」

「いいのいいの！どうせ僕が持っても使えないしね。じゃ！」

そう言って、ストレイは去って行った・・・

「・・・おい、グラデイスさん？」

「む？」

「グラデイスさんとストレイさんはどんな関係なんですか？」

「ああ・・・拙者達は、昔からの友人でござるよ。」

「あ、そうだったのか・・・」

そう。ストレイは、グラデイスの友人だったのだ。だからこそ、グラデイスが心配で搜索を様々な探検隊に頼んでいた。しかし、この探検隊も見つけられず、諦めかけていた時に、ウイングズの話を知り、ウイングズに最後の希望を託そうと思ったのだ。

「でも、何でストレイさんはグラデイスさんと友人、って事を言わなかったんだ・・・？」

カズヤが腕を組んで考える。が、すぐに答えは出た。

「多分、訊かれてないからでござるよ。」

「・・・え？」「・・・」

全員の声が重なった。

「そういう奴でござる。彼は。」

「は、はあ・・・そうなんですか・・・」

少しよく分からなさそうな顔をするカズヤ。

「さて、拙者もそろそろ行かなくては。色々世話になったな。では、これにて！」

そう言いつと、グラデイスはその場から去って行った・・・

「凄い探検家らしいんだけど・・・」

うーん、と唸るカズヤ達であつた・・・

第17話 氷の牢 完

次回 閉ざされた海へ

第17話 氷の牢（後書き）

特に今後のストーリーには必要無いので、シークレットランクは省きました。

第18話 閉ざされた海へ（前書き）

久々の更新です！

カズヤ

「作者のテスト期間が終わったしね。」

苦しい戦いだった・・・

カズヤ

（無視）「じゃあ第十八話、すたーそー！！」

フィルミィ

「だからスタートだってばあー！！」

ナイス滑り込み突っ込み。

カズヤ

「っていつか自分で言ってると思ったけど、『すたーそー』って何・・・？」

僕のいつかの誤変換です。

カズヤ、フィルミィ

「・・・」（――・・）

第18話 閉ざされた海へ

前回、バリヤードのストレイの依頼を受け、グラデイスの搜索の為吹雪の島へ向かったウイングズ。道中、フィルミイのシスコン兄、フォーレンに会ったり、テンションの上がり下がりが激しいユキメノコ、スウィンに会ったりと、色々あったが、何だかんだでウイングズはグラデイスを見つけ、助け出す事に成功した。という訳で、一段落ついたところで彼らは、分担して色々やっていた。例えば・

「ショウさん、リンゴを五つと・・・後・・・復活の種を二つお願いします。」

「はいよ!」

お客さん・・・フィルミイに頼まれ、ショウは倉庫から言われた物を取り出す。もう分かると思うが、フィルミイは買い出しに来ている。

「全部で1725ポケになります」

「はい。えっと・・・」

フィルミイは、サイフから言われた金額のポケを取り出す。ちなみに、今更な説明をすると、今使ったサイフはウイングズ共通資金だ。皆個別にサイフも持っている。個人的に欲しい物は自分のサイフからポケを出して買い、探検に必要な物は、ウイングズ共通資金で買

うのだ。無論、これらは報酬で貰ったポケであり、報酬の二分の一は共通資金。残りを四等分して個人資金に回すのだ。ちなみに、割り切れない時はその時でどうにかする。余談だが、この間フィルミイが買った料理道具は、フィルミイがポケを出して買った物である。

「はい、シヨウさん。」

フィルミイは、1725ポケをシヨウに差し出す。

「どうもありがとうございました〜」

いつも通りの笑顔を見せながら、シヨウはそう言う。

「あ、そう言えば知ってますか？」

「ん？何を？」

帰ろうとしたところをシヨウに呼び止められたので、足を止めるフィルミイ。

「ほら！少し前にあっちの山の方で……！」

そう言っただけでシヨウが指さしたのは……

「（……あつちは……空の頂の方角……）」

「あそこから突如放たれた光線みたいなの！見ませんでしたか？」

何かを考えているような表情のフィルミイに、呼び掛けるように訊ねるシヨウ。

「え？あ、うん・・・」

フィルミイは、その『光線』に覚えがある。

「（・・・ロアのソーラービーム、の事かな・・・）」

少し前に、ウィングズは空の頂に行った。山頂で出会った、自身の事を四天王と名乗ったベイリーフのロア。そのロアから放たれたソーラービームはとてつもない威力で、少し遠くに見えていた山の山頂付近の一部を消し飛ばした。

「（今頃どうしてるんだろう・・・）」

フィルミイは空を見上げ、どこで何をしてるかも分からないロアが今何をしているのかを考えた・・・が、フィルミイに答えが見つかるはずも無かった・・・

一方・・・

「あゝ．．．暇だ．．．」

そうウィングズ基地で呟くのは、一匹のアリゲイツ．．．クルードである。

「よりもよつて、留守番か．．．．．樂つちゃ樂なんだがな．．．
．．．．．なんかな．．．」

非常につまらなさそうな顔をしている。

「．．．あゝ！もう！暇だあああ！！」

と、その時、

「ゴバっ！？」

クルードの頭に何かがぶつかり、鈍い音をたてた後、クルードが表現しづらい悲鳴を挙げる。

「はあ．．．アンタうるさい。」

「いったたたた．．．ル、ルナ！おまつ！本投げるって．．．！」

そう。今の鈍い音（ついでにクルードの悲鳴）の原因は、同じく留守番していたルナが投げつけた本である。え？投げつけられた本の

内容？なんか面倒臭いんでご想像にお任せします。

「適当だなおい！」

「・・・アンタ誰に言ってるの・・・？」

何故か天（天井）に向かって叫ぶクルードを、ルナは痛い人を見る目で見る。

「や、やめろ！そんな目で見るなよ！なんか今突っ込まなきゃいけない気がして・・・」

必死に弁解するクルードすらどうでもよくなったのか、ルナは自分が読んでいた本に視線を戻す。

「まあいいわ・・・暇だかなんだか知らないけど、うるさいから騒がないで。」

「（・・・ほんっとコイツカズヤ以外には可愛げねえな・・・）」

と、心の中では思っけていても、声に出せない自分になんとなく情けなくなるクルードであった・・・

「・・・っていうか、お前何読んでんだ・・・？」

「別にどうでもいいでしょ・・・」

クルードの質問に対し、ルナは話す気は無いようだが、わざわざ本を見えないようにしない事から考えて、隠すつもりも無いらしい。そうなればクルードが起こす行動は一つ。

「どれどれ・・・？」

クルードはルナに近付き、本の内容・・・というか、本の表紙のタイトルを覗いてみる。特にルナは気にしてる様子は無い。

「え〜っと・・・『可愛いもの大全集』・・・？」

クルードはルナの顔を見してみる。よく見ると、少し頬を赤らめて、少しニコニコしながら本を見ていた。

「おまつ・・・こういうの好きなの！？」

「ええっ！？何をそんなに驚いてるのよ！？」

別に驚かれると思っていなかったルナは、さすがにビックリした。

「いや・・・何て言うか・・・う〜ん・・・」

「・・・何よ？私が可愛いもの好きじゃいけないの？」

少し不機嫌そうになるルナ。

「いや、なんか普段がアレだから・・・」

「・・・っ！悪かったわね！無愛想で！」

ルナはそう吐き捨てると、クルードから距離をとってまた本を読み始めた。

「（・・・怒らせた・・・かもな・・・いや、かもじゃないな・・・怒ってるな・・・）」

そう思いながら、少し反省するクルードであった・・・

「閉ざされた海？」

ここはプクリンのギルド地下一階である。掲示板の依頼を取りにここへとやって来たカズヤは、フランからとある話を聞いていた。

「ええ。海にあるダンジョンで、前まで流氷なんかでずっと入れなかった不思議のダンジョンの事ですわ！」

「ふーん・・・閉ざされた海、ねえ・・・」

腕を組んで何かを考えるカズヤ。

「今まで入れなかった未開の地・・・きつとあそこにはお宝がありますわ！」

「お宝、かあ・・・」

「潮の流れなんかからしても、あそこには色々な物が流れ着いてる可能性が高いんですの！ああ・・・私も時間をなんとか作って、閉ざされた海へ行きたいですわ・・・」

「・・・よし！決めた！」

「え？」

突然大きな声を挙げたカズヤに、きよんとするフラン。

「閉ざされた海に行こ、っと。」

「ええ！？ま、待って下さい！あそこは私が最初に・・・！」

「いやいや、ここは早い者勝ちだよ。」

「うう・・・（卒業した身が羨ましいですわ・・・）」

そう思いながら、ガツクリと腰を落とすフラン。

「で、でしたら！閉ざされた海で何かお宝を見付けたら、私にも見せて下さいませんか？」

「ん？まあそれくらいないけど・・・」

こちらはあっさりと了承するカズヤ。

「じゃあ宜しく願いしますわね。」

そう言い、丁重に御辞儀すると、フランはその場を去っていった・・・

・

「・・・さて、帰って皆に話すか・・・」

そう言うつと、カズヤもこの場を後にし、ウィングズ基地へと帰って行った・・・

「という訳で、閉ざされた海へ行こうと思っただけど・・・」

場所は再びウィングズ基地。カズヤとフィルミィも帰ってきて、カズヤは早速閉ざされた海の話をしていた。

「・・・いや、いきなり『という訳』とか言われてもな・・・」

「さっきフランから聞いてね。どんな所かと言うと・・・」

・・・説明中・・・

「カズヤ！それは行かなきゃだよ！」

フィルミィは目をキラキラさせて言う。やはりフィルミィは、未開の地の探検などは好きなようだ。

「私はカズヤさんが行くならついて行きます！」

ルナも行く気満々だ。まあ、理由はアレだが・・・

「へへっ！海なら水タイプの俺に任せとけ！」

そう言つて、クルードは右手で自分の胸を叩く。どうやら、かなり自信満々のようだ。まあそれもそうだろう。環境的には、クルードはかなり動きやすいのだ。（戦闘では水タイプ同士でなかなか終わらない事がしばしばだが、まあそこは触れないでおこう。）

「皆やる気充分みたいだね！じゃあ早速行こうか！」

「あ、でもどうやって海にあるダンジョンに行くの？」

疑問に思ったのか、フィルミイはカズヤに訊ねる。

「ルインに頼めば大丈夫だと思う。」

忘れてるかもしれないので説明するが、ルインとは前に吹雪の島へと乗せて行ってくれたラプラスだ。ちなみに、本来は幻の大地への案内人だ。最近はトレジャータウン近くの海岸に滞在している。

「そっか！またルインに乗って行けばいいんだね！」

「そういう事！じゃ、皆行こう！」

「うん！」「ああ！」「はい！」

こうしてウィングズは、次なる冒険へと出発した・・・

第18話 閉ざされた海へ 完

次回 謎のタマゴ

第18話 閉ざされた海へ（後書き）

もっとペース速く出来ないかな・・・

クルード

「それはお前が頑張れ。」↑（棒読み）

ルナ

「ま、アンタに更新スピードとか期待してないけどね。」

ひ、酷・・・実はお前ら仲良しか!？

クルード、ルナ

「何でそうなるんだ（の）!」

い、いや・・・なんか俺の心を痛め付ける時の息がピッタリだから・・・

クルード、ルナ

「黙れ（って）。」↑（果てしなく黒いオーラ）

は、はい・・・

第19話 謎のタマゴ（前書き）

更新しましたよ。

カズヤ

「第十九話、スタート！」

早っ！？

第19話 謎のタマコ

「・・・なんか・・・やる事があんまり無いような・・・」

「だな・・・」

そう僕の後ろで呟くフィルミイとクルード。僕達は今、閉ざされた海を進んでいる。え？何で急に僕視点なのかって？作者の気まぐれだよ。という訳で、今回は僕視点で話を進めて行くから宜しく。まあメタ発言はこの辺にしといて・・・

「あ、カズヤ。また来たよ？」

「ほんとだ。」

そう言い、僕は皆の前に立つ。やって来たのは、ここに住んでいるであろうキングドラ。ここに出てくる敵ポケモンの中ではなかなかの強さだけど・・・

「あ、やっぱりそれか・・・」

皆僕を見ると、まあ当然っちゃあ当然なんけども、水タイプ技を放ってくる。バブルこうせんや、みずのはどう、ハイドロポンプなんかをね。でもまあ・・・

「効かないんだけどね・・・」

キングドラのハイドロポンプは、僕に直撃する寸前で、僕が右腕に

つけてる腕輪に吸収される。こうなるといつも敵ポケモンは驚くんだよね……だからその隙につ！

「ドラゴンクローー！！」

よし、決まった。ってな感じでさっきから敵を倒してるから、フイルミイ達は暇になっちゃうんだろうね……いや、でもこれが一番確実というか……

「いや、でもやっぱスゲーよな！そのフレイムバングル！」

と言いながら、クルードが近付いてくる。あ、読者さん達に教えるの忘れてた……。さっきハイドロポンプを吸収した腕輪は『フレイムバングル』って言うてね。まあ知ってる人は知ってるだろうし、知らなかった人も前々回の話を見れば分かるだろうけど……。フレイムバングルは『ヒトカゲ』『リザード』にも効力がある『リザードン』専用装備でね。水タイプ技を吸収して、装備者の体力に変えちゃうんだよ。水タイプが苦手なヒトカゲ、リザード、リザードンにとっては重宝する装備なんだよね。っていうかヒトカゲとリザードにも効果あるんだから、『リザードンの専用装備』ってのはなんか違う気がするんだけど……。あ、話が長くなりすぎたね。ごめんごめん。

「あの、カズヤ？何をそんなに考え込んでるの？」

「あ、そう見えた？今ちよつと読者さん達に色々説明してたんだよ。」

「ど、読者……？」

「カズヤさん・・・なるべくメタ発言はやめた方がいいかと・・・」
ルナに注意されちゃったよ・・・フィルミイは首を傾げてるし。なんかクルードは呆れた表情で溜め息吐いてるし・・・なんかクルードに呆れられるとイラッと来るな・・・

「・・・ねえカズヤ・・・辛くない・・・？」

そう訊ねてきたのはフィルミイ。僕の事心配してくれてるみたい。やっぱり彼女は優しいや。

「大丈夫だよ、フィルミイ。」

僕は彼女になるべく心配を掛けないように、微笑んで見せた。フィルミイは僕に微笑み返した後、また前を向いて歩き始めた。

「あ・・・あのバカップル見ててイライラすんな・・・」

「あんの茶色女・・・!!」

「茶色女!？」

・・・後ろのやり取りは聞かなかった事にしよう・・・

「・・・ここが最深部・・・かな？」

僕達は、閉ざされた海の最深部らしき場所へと到着した。

「なんだか神秘的な所だね！」

「・・・それは同感ね。」

フィルミィ、ルナはこの光景に見とれてるみたいだね。女の子は
こういうの好きそうだしな・・・

「っていうか、最深部なんだから何かねーの？」

「さあね・・・探検に来た場所に、必ずしも何かあるとは限らない
しね。」

「まあ・・・そうなんだけどな・・・」

クルードが少しがっかりしている。まあどうでもいいけどね。

「どうでもいいと思うなよ・・・」

こいつ心読術でもあんのか？

「ねえ・・・あそこに誰かいない・・・？」

ん？フィルミイが何か言ってる・・・

「・・・あ、ほんとだ。」

「誰だ？こんな所に・・・」

「探検隊かしら・・・？」

探検隊、ねえ・・・一匹しかいないからあんまり探検隊には見えな
いけど・・・

「ちょっと近づいてみようか・・・」

という訳で、僕達は近づいてみる事にした。

「あの・・・？」

「アンタ誰？」

うわっ・・・ルナ・・・若干言い方きついよ・・・

「ん？・・・あら、あんた達は・・・」

そこにいたポケモン・・・ライチュウは、僕達を知ってるような素

振りを見せる。口調からして、性別は多分雌かな．．．っていうか．．．あれ？

「そのタマゴは．．．？」

ライチュウの足元には何だか普通とは違う、水色のちょっと神秘的なタマゴがあった．．．なんかライチュウは、黒色で先端にエメラルド色の宝石がついている杖を持ってるし．．．

「．．．？何かその宝石、どこかで見た事ある気が．．．」

フィルミィ．．．？ん？待てよ？そう言えば僕も見た事あるような．．．

「ちょっと、一気にそんな色々言われても答えられないわよ．．．」

ライチュウはなんか呆れた様子で溜め息をしてる．．．

「そう言えば、アンタとはトレジャータウンでぶつかったわね．．．？」

「え．．．？」

僕とぶつかった．．．？いつ．．．？ライチュウと．．．？

．．．．．

『うわっ！』

『きゃあ!』

・
・
・
・
・

『あら、ごめんなさい!大丈夫かしら?』

・
・
・
・
・

「あ!そう言えばぶつかった!」

「私は覚えてないな〜・・・」

「俺も。」

「・・・いつの話?」

フィルミイにクルードも覚えてないみたいだ・・・まあルナはいなかったからしょうがないけど。

「こんな所で何をしてるんですか?」

「ああ、仕事よ仕事。ちよつとね。」

ライチュウはそう言うと、杖を足元にあるタマゴに近付ける。

「何してんだ？」

「ちよーつとこのタマゴの情報をコピーしてるだけよ。」

情報をコピー！？何だそれ！？

「『そんな事出来るのか？』って顔してるわね？この杖を使えば出来るのよ。」

この杖は一体何なんだ・・・？

「・・・よし、コピー完了ね。じゃ、あたしは帰るわ。」

「え？」

そうライチュウが言った途端、そのライチュウを青い光が包んだ。穴抜けの玉、かな？

「・・・何だかよく分からないポケモンだったね・・・？」

フィルミィが苦笑いでこっちを見てきた。僕も苦笑いしておこう。よく分からないポケモンだった、ってのは僕も思ったしね・・・

「とりあえず・・・このタマゴどうするんだ？」

「うーん・・・」

どうしよっかな・・・タマゴがあ・・・なんか神秘的なタマゴだなあ・・・ここに置きっぱなしにした方がいい気がしなくも無いけど・・・いや、でもこのまま何も無いってのも・・・

「……………よし！持って帰ろう。」

「いいのかなあ？」

首を傾げる様子が可愛かったのはまあ言わなくても分かるからいいとして……

「まあ……いいんじゃない？」

「まずかつたら後で返せばいいわよ。」

なんかクルードとルナは妙なところで息ピッタリだな……

「じゃ、とりあえず今回はこれで探検終了！皆！帰ろう！」

「うん！」

「ああ！」

「はい！」

ま、そんな訳で僕達は帰る事にした……タマゴを持って……

「・・・こんな感じでいいかな・・・」

僕達は基地で、藁でタマゴを置く場所を作っていた。というか作り終えた。

「後はこれを置いてっ・・・」

僕は閉ざされた海で手に入れたタマゴを作った藁のベッドに置いた。

「いつ産まれるかなあ？」

「ま、その内産まれんだろ。」

「（ちょっと・・・楽しみかも・・・／／／／）」

ん？今ルナの顔がちよつと赤くなつたような・・・まあ、気のせい
いか・・・

「それじゃ今日はもう暗いし、寝よつか！」

そう。もうすっかり夜だつたりするんだよね。え？ゲームではそんな事無い。いや、これゲームじゃないから。小説だから。まあいいや、今日はもう寝るから。お休み・・・

次の日・・・

「・・・このタマゴ・・・なんかたまに動いてないか・・・？」

「もうすぐ産まれるのかな・・・？」

そうフィルミイが言った矢先の事だった・・・

『ピキッ・・・』

「ん？ヒビが・・・」

『パリッ』

「う、産まれる！？」

っていうか産まれんの速くない！？

「（ど、どんなポケモンなんだろう・・・！）」

あれ？なんかルナが凄いわくわくしてる？

『パリパリッ！』

「あ！もう産まれるよー！」

そして・・・そのポケモンは産まれた・・・

第19話 謎のタマゴ 完

次回 ウィングズの子育て日記

第19話 謎のタマゴ（後書き）

そう言えばさあ・・・

カズヤ

「ん？」

フィルミィ

「何？」

クルード

「ん？」

君達に人気投票の結果教えて無かったな、って。

カズヤ

「あ・・・」

クルード

「そう言えば・・・」

フィルミィ

「聞いてない、ね・・・」

という訳で順位教えておくよ。カズヤ、君は三位だ。

カズヤ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・マジかー！！
！？」

マジだ。

カズヤ

「しゅ、主人公なのに・・・」

んで、クルード、君は二位だ。

クルード

「・・・・・・・・・・・・・・・・マジか！！
！？」

カズヤと同じ反応だな・・・（まあ意味は違うだろうけど・・・）

カズヤ

「なああんでお前が僕より・・・！俺より上なんだあああああ！！
！！！！！！」

クルード

「どわあああ！！？こんな所で覚醒するなあああああ！！！！
」

・・・うわあ・・・

んで、フィルミィ、君は一位だ。

フィルミィ

「えっ・・・？私が・・・！？」

・・・あ、固まっちゃった・・・まあいつか。

では、また次回で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8492v/>

ポケモン不思議のダンジョン空の探検隊 ウィングズ ～君と歩むこの道～

2011年10月26日20時22分発行